

資 料

繭絲織度と養蠶法との關係論文綜合抄録 (II)

勝又藤夫・横山忠夫・横澤正雄

飼育の(12) 桑品種 (實驗例56)

繭絲織度は年により、蠶品種、飼育時期等により區々にして一定の傾向なきも、魯桑、烏ノ内、改良鼠返、鼠返、十文字、大葉早生、市平、多胡早生等の代表的なるものを取りて見るに、烏ノ内、十文字は比較的太く、改良鼠返、大葉早生は稍々太き傾向あり。市平、魯桑、鼠返は稍々細き傾向あるものの如く、多胡早生はそれ等の中間にあり。

(294) 桑樹葉質試験

梅澤博昌、井原千知 長野縣松本原蠶種製造所蠶事報告第2號 大正11年2月

桑品種として白桑、甘樂桑、荆桑、魯桑、鶴田、

烏ノ内、長沼、ハツ房、扶桑丸、十文字、鼠返を用ひ、蠶品種として日本錦及びセクザートを用ひた。

(1) 日本錦の場合

供試11桑品種を各品種別に給與した場合、繭絲織度は白桑、荆桑、長沼桑太く、烏ノ内、ハツ房區は細し。

供試11桑品種を各品種別に給與した場合、次代蠶の繭絲織度は十文字區最も太く、白桑、烏ノ内、荆桑之に次ぎ、鼠返、扶桑丸、長沼桑は細し。

(2) セクザートの場合

供試11桑品種を各品種別に給與した場合、繭絲織度はハツ房最も太く、鼠返、白桑之に次ぎ、十文字、甘樂桑、荆桑、扶桑丸は細し。

供試11桑品種を各品種別に給與した場合、次代蠶の繭絲織度は魯桑、荆桑區最も太く、鼠返、白桑、鶴田、扶桑丸區は細し。

(295) 桑樹品種と蠶齡との關係試験

梅澤博昌、井原千知 長野縣松本原蠶種製造所事績報告第2號 大正11年2月

春蠶期は稚蠶用桑品種を市平、相模早生、多胡早生、小牧、鼠返の5品種とし、壯蠶用桑品種を鶴田、鼠返、ハツ房、小牧、十文字の5品種とし、是等を組合せて25區とす。

秋蠶期は稚蠶用桑品種を、小牧、鶴田、改良十文字、鼠返の4品種、壯蠶用桑品種を荆桑、大桑原、鼠返の3品種とし、是等を組合せて12區とした。

蠶品種は日本錦、アスコリピチエノ及び兩者の交雜種とす。繭絲織度は春蠶期にてアスコリピチエノでは鼠返一ハツ房區最も太く、多胡早生一ハツ房區之に次ぎ、多胡早生一鶴田區最も細く、鼠返一鼠返區之に次ぐ。

秋期にて交雜種では鼠返一桑原、小牧一荆桑、鶴田一荆桑區太く、鼠返一改良十文字、鶴田一改良十文字區は細し。日本錦では鼠返一桑原最も太く、鶴田一桑原之に次ぎ、小牧一鼠返、改良十文字一荆桑最も細し。

(296) 春蠶飼料試験

目 次

III 飼育關係部門(續き).....	40
12. 桑 品 種.....	40
13. 仕立法及び收穫法.....	46
14. 肥料の種類.....	49
15. 施 肥 量.....	51
16. 日照不足桑給與.....	52
17. 特殊飼料.....	53
18. 刺戟劑接觸.....	54
19. 電燈照明育.....	57
20. 露菌障防劑撒布.....	58
21. 其他(I) 蠶關係雜.....	60
22. 其他(II) 桑關係雜.....	61
IV 上簇關係部門.....	62
1. 上簇温・湿度・氣流.....	62
2. 上簇方法.....	65
3. 熟 度.....	67
4. 簇器の種類.....	68
5. 藥劑撒布.....	70
6. 屋外上簇.....	70
7. 其他(雜).....	71

徳島縣蠶業試験場 徳島蠶試報告第2號 大正12年3月

日1、支4、歐7を用ひ、試験區を全齡青市給與區、全齡魯桑給與區、1,2齡青市3齡清十郎4,5齡魯桑給與區、1,2齡青市3齡後魯桑軟葉給與區、1,2齡青市3齡後魯桑硬葉給與の5區に分けたる場合に、織度に於ては蠶品種的に多少の差はあれども、全齡青市區、1,2齡青市3齡後魯桑硬葉區概して細く、魯桑軟葉區は魯桑硬葉區より太し。

#### (297) 秋蠶飼料試験

徳島縣蠶業試験場 徳島蠶試報告第2號 大正12年3月

日1、支9、日107、支101を用ひ、試験區を全齡青市給與區、全齡魯桑給與區、1,2齡青市3齡清十郎4,5齡魯桑給與區、1,2齡青市3齡後魯桑軟葉給與區、1,2齡青市3齡後魯桑硬葉給與の5區に分けて飼育せるに、織度に於ては各區間一定の傾向を認め難し。

#### (298) 秋蠶飼料試験

徳島縣蠶業試験場 徳島縣蠶業試験場報告第3號 大正13年8月

(1) 日1、支107、支9、支101を用ひ、試験區を第1區(全齡青市給與)、第2區(全齡魯桑給與)、第3區(1,2齡青市3齡清十郎4,5齡魯桑給與)、第4區(1,2齡青市3齡後魯桑軟葉給與)、第5區(1,2齡青市3齡後魯桑硬葉給與)に分けて試験せる場合に、織度は蠶品種的に差異ありて一定の傾向なし。

(2) 支9×日107、日107×支101を用ひ、全齡間を第1區(魯桑給與)、第2區(改良鼠返)、第3區(和助十文字)、第4區(富榮桑)、第5區(富榮桑軟葉)、第6區(富榮桑硬葉)に分けて試験す。織度は第5區最も太く、第3區、第1區細し。

(3) 日107×支9を用ひ、割桑育區、粗割全葉育區、全芽育區に分けて試験せるに、織度は粗割全葉育區最も太く、割桑育區最も細し。

#### (299) 春蠶飼料試験

徳島蠶試、徳島蠶試報告第3號 大正13年8月

(1) 日1、支4、歐7を用ひ、桑葉品種を異にし、桑葉の硬軟を給與せる場合に、織度は蠶品種により差異あれども、1,2齡青市3齡清十郎4,5齡魯桑給與の場合が稍々細き傾向あり。尚軟葉區は硬葉區より太き傾向あり。

(2) 支7×歐7を用ひ、上記1と同様にせるに、織度は大差なきも、全齡魯桑區、1,2齡青市3齡清十郎4,5齡魯桑給與區に太く、1,2齡青市3齡清十郎4,5齡改良鼠給與區稍々細し。

#### (300) 用桑第1試験

茨城第2蠶試 茨城第2蠶試試験成績第1號 大正14年10月

魯桑區 4,5齡魯桑給與

十文字區 4,5齡十文字給與

標準區 4,5齡魯桑、十文字給與

蠶品種は又昔他5品種を用ひたるに繭絲織度は概して十文字區は魯桑區より太し。

#### (301) 用桑第2試験

茨城第2蠶試 茨城第2蠶試試験成績第1號 大正14年10月

島ノ内區、鶴田區、城下區、十文字區、多胡區、魯桑區、5齡十文字區、5齡魯桑區の8區別とす。

(但し始めの6區は4,5齡間夫々の品種桑を給與した)繭絲織度は春期、秋期共に1年毎には各品種間に細太の關係あるも、各年を通じては一定の關係なし。

#### (302) 秋蠶飼料試験

徳島縣蠶業試験場 徳島縣蠶試報告第4號 大正15年3月

支9×日107、日107×支101を用ひ、和助十文字、富榮桑、改良鼠返、魯桑を別々に給與せるに、改良鼠返幾分太く、魯桑幾分細し。

#### (303) 春蠶交雜種飼料試験

徳島縣蠶業試験場 徳島蠶試報告第4號 大正15年3月

支7×歐7を用ひ、1,2齡青市3齡以後魯桑硬葉、1,2齡青市3齡以後魯桑軟葉、全齡青市、全齡魯桑、1,2齡青市3齡以後清十郎5齡魯桑の各區を作りたり。繭絲織度は大差なきも、1,2齡青市3齡以後魯桑硬葉、1,2齡青市3齡以後魯桑軟葉は稍々細い。

#### (304) 異品種桑給與試験

福島縣蠶業試験場 福島蠶試報告第1號 昭和2年3月

春期試験

大正14年春、日1×支4を用ひ、高助、大葉、改良鼠返、島ノ内、混合の各區を設けたり。繭絲織度は大葉、改良細く、高助太し。

大正15年春、日1及び支4を用ひ、市平、大葉、島ノ内、高助、赤木、改良鼠、改良早生十文字、改良魯桑、鶴田を試験す。繭絲織度は支4では赤木、大葉細く、改良魯桑、鶴田太いが、日1では反對に改良早生十文字、改良魯桑、鶴田細く、市平、大葉、赤木太くして一定の傾向なし。

秋期試験

大正14年、青熟×(支101×支4)を用ひ、高助、赤

木、改鼠、島ノ内、春日、甘樂桑、改良早生十文字、魯國野桑、甲撰、改良魯桑につき試験す。繭絲織度は島ノ内、魯國野桑細く、高助太い。

大正15年、支101×(支4×日107)、支101×青熟を用ひ、市平、大葉、島ノ内、高助、赤木、改鼠、改良早生十文字、改良魯桑、混合の各區につき試験せり。繭絲織度は支101×(支4×日107)では改鼠細く、島ノ内太し。支101×青熟では市平細く、島ノ内太し。兩蠶品種にて大葉、高助、改良早生十、改良魯桑、混合等は繭絲織度餘り太き傾向なし。要するに島ノ内にては繭絲織度太きこと確實なり。

### (305) 桑の品種と蠶の發育關係に就て

岸田信治郎、田中泰二、前田義治、倉光敬三 鳥取縣蠶試報告第1號 昭和2年5月

供試品種 支7號×歐7號 支9號  
支101號×日103號 日107號

桑品種を改良魯桑、改良鼠返、大葉早生、栗本、正司、魯八、春日、露國野桑、八品種とす。繭絲織度を見るに、大葉早生、露國野桑、魯八稍々太く、改良魯桑、春日、栗本稍々細し。

### (306) 異品種桑葉給與が春蠶作に及ぼす關係試験成績

西川砂 岐阜蠶試報第6號 昭和3年6月

日1×支4を用ひ、魯桑、國桑第70號、國桑第13號、改良鼠返に付き試験せるに、繭絲織度は國桑第13號、改良鼠返は太く、國桑第70號、魯桑は細し。

### (307) 異品種桑葉給與が秋蠶作に及ぼす關係試験

高杉宗治 岐阜蠶試報第6號 昭和3年6月

浙江×國富を用ひ、魯桑區、改良鼠返區、國蠶第13號區、國蠶第70號區の4品種に付き試験せるに、繭絲織度は魯桑區太く、國桑第70號區最も細し。

### (308) 稚蠶用桑品種と蠶關係試験

大八木實司、伊達實、倉光啓三 鳥取縣蠶試報告第2號 昭和4年7月

稚蠶用桑との關係

支7號×歐7號。稚蠶用桑として大葉早生、市平、改良鼠返、改良魯桑、十文字、和助十文字の六種を用ふ。繭絲織度は十文字、和助十文字稍々太き傾向あり。

### (309) 桑品種と蠶兒發育との關係

大島顯三 石川蠶試報第4號 昭和5年3月

市平、金子、改良鼠返、露國野桑、魯桑、國桑第13號を全齡(國桑第13號を缺く)、稚蠶、壯蠶に給與し影響をみるに、日1×支4では全齡給與の場合、金子、改良鼠返兩區太く、魯桑、市平兩區細し。稚

蠶期給與の場合は改良鼠返區最も太く、國桑第13號區之に次ぎ、金子、市平兩區細し。壯蠶期給與の場合は魯國野桑區最も太く、改良鼠返區之に次ぎ、市平、國桑第13號區細し。

### (310) 桑の品種と春蠶との關係試験

長崎縣蠶業試験場 長崎縣蠶業試験場報告第1號 昭和5年8月

歐1を用ひ、春期に國桑第13號、國桑70號、改良赤芽魯桑、改良鼠返、陸撰、收穫一、赤木の7品種の桑を以て比較試験す。織度について見るに、國桑13號最も太く、國桑70號最も細く、他は大差なし。

### (311) 立通桑園の改良に關する研究

兵庫縣蠶試 兵庫蠶試報第3號 昭和5年8月

春蠶期にありては蠶品種はK7號×A7號とし、桑品種は放任區に中間木及び平治郎、剪定區にも同一品種、根刈區に改良鼠返を用ひたるに、繭絲織度は各區間に差異殆どなし。

初秋蠶期には改良青熟×江白を用ひ、桑品種は中間木、平治郎、改良魯桑とし、各品種共4齡放任桑給與及び5齡放任桑給與兩區に分ちたるに、繭絲織度は中間木4齡放任桑給與區最も太く、根刈改良鼠返給與區最も細し。

晩秋期には江白×改良青熟を用ひ、桑品種は中間木、平治郎、改良魯桑とし、前2品種を各々4、5齡放任桑給與區と放任桑先 $\frac{2}{3}$ 、5齡給與區に分ちたるに繭絲織度は根刈改良魯桑の1區最も太く、中間木放任桑先 $\frac{2}{3}$ 給與區之に次ぎ、平治郎放任桑先 $\frac{2}{3}$ 給與區最も細し。

### (312) 夏秋蠶期に於ける桑品種と蠶兒發育との關係試験

大島顯三、松永實 石川蠶試報第5號 昭和6年3月

市平、金子、魯桑、ハツ房、改良鼠返、水澤、國桑第13號、國桑第70號を用ひ、日110に付稚蠶期及び壯蠶期に分ちて給與したるに、稚蠶期給與の場合は金子區最も太く、國桑第70號區最も細く、他は中間にあり。壯蠶期給與の場合は市平區最も太く、魯桑區、改良鼠返區之に次ぎ、ハツ房、水澤兩區細し。

### (313) 夏秋蠶稚蠶用桑に關する試験

松永實 石川蠶試報第5號 昭和6年3月

蠶品種は日110×支103を用ひ、標準區、春刈摘梢區、春摘立通區、夏刈區に分ち、大葉早生、清十郎を用ひたるに、繭絲織度は大葉早生では夏刈區最も太く、春摘立通、標準兩區之に次ぎ、春刈摘梢區最も細し。清十郎では春摘立通區最も太く、春刈摘梢

區最も細し。

(314) 稚蠶期の用桑品種が蠶兒發育に及ぼす關係試験

静岡縣蠶業試験場 静岡蠶績第19號 昭和6年3月  
桑品種を和助十文字、市平、丸葉十文字、改良鼠返、魯桑、魯八、甲撰、收穫一、國桑13號、國桑70號とし、蠶品種を日107としたるに、繭絲織度は甲撰區最も太く、魯桑區之に次ぎ、收穫一區最も細し。

(315) 異品種給與試験

廣島蠶試庄原支場 廣島蠶試庄原支場彙報 昭和6年3月

第1區 全齡赤木市平  
第2區 全齡改良鼠返  
第3區 全齡和助十文字  
第4區 全齡白桑  
第5區 全齡大葉早生  
第6區 (甲)稚蠶赤市壯蠶改良 (乙)は甲の反對  
第7區 (甲)稚蠶赤市壯蠶大葉早生 (乙)は反對  
第8區 (甲)稚蠶赤市壯蠶白桑 (乙)は反對  
蠶品種は日110を用ひたるに、繭絲織度は第6區(乙)第6區(甲)區最も太く、第3區最も細く、第1、第4區之に次ぐ。

(316) 桑の品種比較試験

牛込正一、吉村龍作、服部文雄、岩根謙 群馬蠶績第10號 昭和6年4月  
春蠶期交雜種飼育成績

日1×支4、支7×歐7を用ひ、市平、多胡早生、富榮桑、島ノ内、春日及び群馬赤木の各桑品種に付、稚蠶期給與、壯蠶期給與及び全齡給與の三期に區別して給與した。本試験は三箇年間に亙つて行はれたが、その平均成績にみるに繭絲織度は稚蠶期間給與の場合には群馬赤木區最も太く、島ノ内區之に次ぎ、春日、富榮桑兩區細し。  
壯蠶期間給與の場合には春日區最も太く、島ノ内區之に次ぎ、群馬赤木區最も細し。  
全齡期間給與の場合には多胡早生區最も太く、市平區之に次ぎ、島ノ内、春日兩區細し。

秋蠶期交雜種飼育成績

蠶品種は日110×支102を用ひ、魯桑、露國野桑、甲撰、甘樂桑、改良鼠返、十文字、多胡早生の各桑品種に付春蠶期と同様に試験したるに、繭絲織度は稚蠶期間給與の場合には甲撰區最も太く、露國野桑、魯桑之に次ぎ、多胡早生、改良鼠返兩區細し。  
壯蠶期間給與の場合には露國野桑區最も太く、十文字區之に次ぎ、魯桑區最も細し。

全齡期間給與の場合には露國野桑區最も太く、甲撰區最も細し。

(317) 春蠶飼料試験

山中徳三郎、羽生貞秋、鹿兒島縣蠶試試験報告第4號 昭和6年8月

桑品種として國桑13號、同70號、改良赤芽魯桑、改良鼠返、陸撰、收穫一、赤木、赤木市平、大葉早生、富榮桑、和助十文字、十文字、五郎治早生の13種を用ひて試験す。蠶品種は日1なり。織度は大葉早生區最太にして、赤木市平、赤木、和助十文字之に次ぎ、改良赤芽魯桑、國桑70號最も細し。他區間には大差なし。而して最太と最細との差は0.47デールあり。

(318) 春蠶交雜種飼料試験

味岡秀夫、羽生貞秋、堀之内綱雄 鹿兒島縣蠶試試験報告第4號 昭和6年8月

蠶品種は日1×支4、歐3×支4、歐7×支7を用ひ、稚蠶用桑區と壯蠶用桑區とに分け、前者は魯桑區(全齡間魯桑給與)、赤市甲區(稚蠶期赤市壯蠶期魯桑)、同乙區(全齡間赤市)、大葉早生甲區(稚蠶期大葉早生壯蠶期魯桑)、同乙區(全齡間大葉早生)の5區に分け、後者は收穫一區、改良鼠返區、富榮桑區、野桑區、赤市區の5區に分け、稚蠶期は一樣に赤市を以て飼育す。織度は稚蠶用桑區に於ては大葉早生區太く、赤市甲區最も細き傾向あり。されど各區間の差顯著ならず。壯蠶用桑區に於ては赤市區最も太く、富榮桑區、收穫一區細き傾向あり。

(319) 秋蠶原蠶飼料試験

山中徳三郎、羽生貞秋 鹿兒島縣蠶試試験報告第4號 昭和6年8月

供試桑品種は國桑13號、同70號、改良赤芽魯桑、改良鼠返、陸撰、收穫一、赤木、赤木市平、大葉早生、富榮桑、和助十文字の13種を用ひ、支101を以て飼育す。織度は大葉早生、和助十文字、國桑70號等太く、收穫一、改良赤芽魯桑特に細し。

(320) 桑品種と蠶の發育との關係調査

兵庫縣蠶試 兵庫蠶試報第5號 昭和7年3月  
蠶品種は支7×歐7、K7×A7を用ひ、桑品種は市平、多胡早生、大葉早生、改良早生十文字、改良鼠返、甲撰、千松、清十郎、新城錦、改良魯桑としたるに、繭絲織度大葉早生を給與せるもの最も太く、甲撰及び新城錦を給與せるもの最も細し。

(321) 稚蠶用桑と蠶兒發育との關係

古性淺次郎、大友安太郎 秋田蠶試蠶事報告第8號 昭和7年4月

種蠶給桑品種に依り次の11區に分つ。新秋田區、富榮桑區、赤木區、利榮區、改良鼠返區、栗本區、鶴田區、島ノ内區、國榮13號區、國榮70號區、葉摘改良鼠返。壯蠶期には何れも和助十文字を給與して。蠶品種は日110×支105。繭絲織度は最も太きは改良鼠返にして島ノ内之に次ぎ、最も細きは鶴田、富榮桑なり。

### (322) 秋蠶種蠶用桑品種と蠶の飼育試験

栃木蠶試 栃木蠶績 昭和7年4月

市平、島ノ内、十文字、改良鼠返、魯桑、國榮70號各品種混合の7區とし、蠶品種は初秋は見旭×見直、晩秋には日110×支105を用ひた。繭絲織度は秋は十文字區最も太く、改良鼠返、市平の兩區最も細し。晩秋は島ノ内區最も太く、各品種混合區最も細し。

### (323) 夏秋期種蠶用桑品種と蠶との關係試験

栃木蠶試那須支場 栃木蠶試那須支場事報 昭和7年4月

標準、魯桑、十文字、島ノ内の四區とし、蠶品種は支105×日110を用ひた。繭絲織度は初秋には十文字、島ノ内兩區他區より特に太し。晩秋には十文字區最も太く、魯桑區最も細し。

### (324) 夏秋蠶桑異品種給與試験成績

小林庸、中村治太郎 青森蠶報第2號 昭和7年5月

#### (1) 桑異品種の蠶繭に及ぼす關係試験

桑は赤木、改良鼠返、重島、甲撰、改良早生十文字、魯桑實生を用ひ、日2化×支2化種を用ひて試験したるに、繭絲織度は重島給與のもの稍々細いが、他の區のものは大差なく、たゞ改良鼠返給與のもの稍々太き傾向を示せり。

#### (2) 桑異品種給桑量の増減と蠶繭との關係試験

桑は重島以外は前と同様にして、その各々の種蠶期を對照區、三割減區、五割減區に分てり。蠶品種は日109×支102、日110×支103、日110×支105を用ひたるに繭絲織度は給桑量減少と一定の關係なし。

#### (3) 桑異品種の給桑量の増減と蠶繭との關係試験 (其の二)

桑品種は前試験と同様。蠶品種は日110×支105を用ひ、各區を對照、五割増、五割減の3區に分てり(但し種蠶期)。繭絲織度は概して給桑量の多きもの程太し。

#### (4) 異品種の貯藏時間と蠶繭との關係試験

貯桑時間により對照區、20時間區、30時間區とし前試験と同一桑品種に付き試験せるに、繭絲織度は赤木、改良鼠返、魯桑實生は稍々太きも大差なく、貯桑時間長びくに從ひ細くなる傾向を認む。

### (325) 夏秋種蠶用桑に関する試験成績(豫備試験)

愛知縣蠶業試驗場 愛知縣蠶業試驗場印刷物 昭和8年3月

桑の品種との關係

蠶品種は日107號×支101號にして、桑品種は魯桑、魯八、收穫一、國榮第13號、國榮第70號、大葉早生、赤木、改良鼠返の八品種なり。繭絲織度は秋蠶期に於て赤木區稍々細き傾向あり。其他の區には大差なし。晩秋蠶にありては各區間に一定の傾向を認め難し。

### (326) 桑の品種と蠶兒發育との關係試験

宮崎縣蠶業試驗場 宮崎蠶試報告第3號 昭和8年3月

支13×歐16、支14×歐16、日110×支105、日7×支106を用ひ、種蠶市平壯蠶改鼠、種蠶市平壯蠶魯桑、種蠶大葉壯蠶改鼠、種蠶大葉壯蠶魯桑、種蠶壯蠶改鼠、種蠶改鼠壯蠶魯桑、種蠶魯桑壯蠶改鼠、種蠶壯蠶魯桑の各區を設けたるに、繭絲織度には大差ない、故に一定の傾向を認められぬ。

### (327) 唐桑の飼料的價值

北澤茂、岡村貢、武田一郎 慶尚北道原蠶種製造所彙報第1號 昭和8年3月

春蠶期は唐桑、魯桑、改良鼠返、島ノ内、錦桑を用ひ、日107、日110を飼育したるに、繭絲織度は改良鼠返最も太く、島ノ内之に次ぎ、唐桑、魯桑の順序なり。秋蠶期には唐桑と魯桑を比較したるに魯桑太し。

### (328) 桑異品種給與試験成績

岩手蠶試 岩手蠶試彙報第5號 昭和8年4月

桑品種では清十郎、改良鼠返、改良早生十文字、交互給與の四區とし、日110×支105を用ひて試験したるに、繭絲織度は交互給與區稍々太し。

### (329) 蠶種製造用桑に関する研究

塚田桓春、金炳圭、趙春大 慶尚南道原蠶種製造所彙報第1報 昭和8年8月

第1區(魯桑)、第2區(鼠返)、第3區(十文字)、第4區(市平)、第5區(改良鼠返)、第6區(大葉早生)、第7區(錦桑)、第8區(山桑)と區分し、春は日1、支4、秋は日107、支101を用ひたるに、繭絲織度は初代蠶にては春は第3區最も太く、第2、第1區之に次ぎ、第7、第8區細し。秋は第6區最も太く、第4、第3區之に次ぎ、第7、第8區細し。次代蠶にては春期飼育の次代ものは細太多くして一定の傾向なく、たゞ第8區は比較的細し。秋期のものは第1區最も太く、第5、第3兩區細き傾向あり。

### (330) 壯蠶期用桑試験

伊吹豊、重柄瀬十郎、齋藤歌吉 島根蠶試報告第23號 昭和9年3月

蠶品種は春は支13×楸16、秋は支105×日110を飼育せるに、繭絲織度は春は改良魯桑區最も太く、國桑第70號區最も細し。秋は三者間に大差なきも國桑第70號區最も細し。晩秋は改良鼠返區最も太し。

(331) 蠶兒五齡期に於ける異品種桑給與が次代蠶に及ぼす關係に就て

宮川繁治 岐阜蠶試報第11號 昭和9年3月

日110、支103を用ひ、桑品種を魯桑、改良鼠返、赤市、大葉早生としたるに、次代に於て赤市區最も太く、大葉早生區之に次ぎ、魯桑區最も細し。

(332) 晩秋期全齡用桑試験

山内眞樹、前田隆信 鹿兒島縣蠶業試驗場報告第21號 昭和9年3月

楸17を用ひ、全齡を通じて赤市平給與のものを第1區、大葉早生給與のものを第2區、改良鼠返給與のものを第3區、改良魯桑給與のものを第4區、改良早生十文字給與のものを第5區、富榮桑給與のものを第6區、奄美桑給與のものを第7區とせり。試験成績中織度に關しては、大葉早生給與區最も太く、赤市平給與區、奄美桑給與區、早生改良鼠返給與區之に次ぎ、最も細きは改良早生十文字給與區なり。

(333) 桑品種と蠶繭との關係試験

徳島縣蠶業試驗場 徳島縣蠶試報告第7號 昭和9年3月

昭和6年は春 金黃×楸9、秋 日110×支105、晩秋 日110×支105。

昭和7年は春 支14×楸16、晩秋 支106×日110。

昭和8年は春 楸16×支14、秋 日7×支106、晩秋 日7×支106。

桑品種は大葉、青市、市平、改鼠、富榮桑、荆桑、魯八、魯桑。

繭絲織度は各區間に大差なけれども、魯桑は概して細き傾向ある數字を示す。

(334) 飼料種類試験

日高末吉、石川延 全羅北道原蠶 試験報告第2報 昭和9年3月

支101×支9、日107×(支9×支101)、日106×支101、支4等の蠶品種を用ひ、青木市平區、全原1號桑區、魯桑區、赤木市平青木市平大葉魯桑改鼠全原1號混食區、青木市平全原1號混食區、魯桑改鼠全原1號混食區を作り試験せるに、繭絲織度には一定の傾向なし。

(335) 晩秋蠶期稚蠶用桑試験

山内眞樹、前田隆信 鹿兒島蠶試報告第21號 昭和10年3月

蠶品種は楸17を用ひ、桑品種は改良魯桑、改良鼠返、富榮桑、奄美桑を用ふ。試験區は、第1區(全齡改良魯桑給與)、第2區(稚蠶改良鼠返壯蠶改良魯桑給與)、第3區(稚蠶期富榮桑壯蠶改良魯桑給與)、第4區(稚蠶奄美桑壯蠶改良魯桑給與)の4區を設け、桑品種による稚蠶用桑の差異の繭質、産卵に及ぼす影響を知らんとせり。試験成績中織度に就いて見るに、織度の太きは奄美桑にして、富榮桑、改良魯桑之に次ぎ、改良鼠返最も細し。

(336) 晩秋期5齡桑試験

山内眞樹、前田隆信 鹿兒島蠶試報告第21號 昭和10年3月

蠶品種は支105×日110を用ひ、3齡迄赤市平給與し、4齡改良鼠返、5齡に於て改良鼠返及び改良魯桑の2區に分ちて施行す。即ち5齡期改良鼠返給與のものを第1區とし、5齡期改良魯桑給與のものを第2區とし、5齡期前半改良給與、後半改良魯桑給與のものを第3區とし、5齡期前半改良魯桑、後半改良鼠返給與のものを第4區とし、以て5齡期の用桑の差異が繭の性狀に及ぼす影響を知らんとせり。試験成績中織度に就いて見るに、織度の最も太きは第2區にして、第4區之に次ぎ、第3區、第1區と順次細くなる。

(337) 桑品種と原蠶飼育との關係試験

池江輝二 長崎蠶報第3號 昭和10年8月

異品種桑葉を以て原蠶飼育せし場合に、之が蠶の發育、收繭及び産卵等に及ぼす影響について調査せり。

試験區を春期は全齡市平區、全齡大葉早生區、全齡改良鼠返區、全齡魯桑區、稚蠶市平壯蠶魯桑區、稚蠶大葉早生壯蠶魯桑區、稚蠶改良鼠返壯蠶魯桑區、稚蠶沖繩桑壯蠶魯桑區の8區に分ち、國蠶支13號にて飼育し、初秋期は更に稚蠶期龍舌菜鼠返交互壯蠶魯桑區1區を増し、國蠶日110號にて試験せり。織度に關しては、春期は稚蠶市平壯蠶魯桑區太く、稚蠶大葉早生壯蠶魯桑區之に次ぎ、稚蠶沖繩桑壯蠶魯桑區及び全齡大葉早生區最も細しと雖も、夫等の差著しからず。初秋期は稚蠶市平壯蠶魯桑區最も太く、稚蠶沖繩桑壯蠶魯桑區、稚蠶改良鼠返壯蠶魯桑區の順に細くなり、全齡魯桑區最も細し。されど夫等の差は春と同様顯著ならず。

(338) 飼育並に蠶卵に關する試験

鹿兒島縣蠶業試驗場大島支場 鹿兒島縣蠶業試驗場大島支場報告第2號 昭和11年4月

1. 飼料に關する試験

内地桑と在來島桑との飼料的價值比較試験なり。

第1試験に於ては試験區は島桑區(在來島桑を以て飼育す)、内地桑區(收穫一を以て飼育す)の2區を設け、蠶品種は日110×支105、支105×日110、歐18×支106、支106×歐18を用ふ。

第2試験に於ては稚蠶島桑壯蠶收穫一區、稚蠶收穫一壯蠶島桑區の2區を設け、蠶品種は日110×支106を用ふ。第3試験にては試験區は第1試験と同じにして、蠶品種は支105、日110原種を用ふ。

以上いづれも普通育なり。織度は島桑區は内地桑區に比し稍々太き傾向あり。又稚蠶島桑壯蠶收穫一區は其の反對區より太し。尙又原蠶に於ても島桑區は内地桑區より太し。

2. 飼育法に關する試験

1. 稚蠶飼育試験

試験區は安安全育區、木箱育區、亜鉛箱育區に分け、春期稚蠶飼育試験をなす。供試蠶品種は歐16×支14、桑は在來島桑なり。織度は木箱育區最も太く、安安全育區最も細し。

2. 壯蠶期飼育試験

イ、春期壯蠶期を普通育區、吊棚育區、平條桑育區に分け、支14×歐16、支14×歐17、支106×歐18を以て在來島桑を給與し試験す。

織度は平條桑育區太く、普通育區僅かに細く、吊棚育區最も細し。

ロ、春期壯蠶期を室内平座育區、同條桑育區、高倉平座育區、同條桑育區、薬小屋平座育區、同條桑育區、庇平座育區、同條桑育區の8區に分けてなす。

供試蠶品種、桑品種はイと同じ。織度は平座育にありては室内區、條桑育にありては薬小屋區最大を示し、一定の傾向なし。

ハ、秋期日110×支105を用ひ、壯蠶期を室内平座育區、4齡屋外平座育區、4齡屋外條桑育區、5齡屋外平座育區、5齡屋外條桑育區の4區に分け試験す。桑は在來島桑を用ふ。織度は4齡屋外條桑育區最も太く、4齡屋外平座育區最も細し、他は差殆どなし。

(339) 桑品種と原蠶飼育との關係試験

池江輝二、原岩根、早崎博 長崎縣蠶業試験場報告第4號 昭和11年8月

供試蠶品種は春は歐18、支16、初秋及び晩秋は日110、支103を用ひ、稚蠶期を春は市平、初秋は改風、晩秋は改風及び魯桑を以て一様に飼育し、壯蠶期は

市平區、大葉早生區、改良鼠返區、改良赤芽魯桑區の4區に分けて試験す。織度は蠶品種及び飼育時期により異り、一定の傾向を認め難し。

其他抄録番號(19)(24)(110)(187)(287)(352)(384)(385)参照。

飼育の(19)仕立法及び收穫法(實驗例33)

試験區が餘りにも區々にして、比較對照困難なるも概して云へば、繭絲織度は秋蠶専用桑園區と、春秋兼用桑園區との間に確然たる傾向なく、春發芽前伐採區と再發芽區との間に於ても同様なり。新梢育區は普通育區よりも太き場合多し。

(340) 根刈桑と立木桑との葉質比較及び之が繭質並に生絲の練減に及ぼす影響

中村雅次郎 東京蠶業講習所試験成績第50號 大正2年2月

立木、根刈兩桑葉を用ひて飼育したる繭質調査に於て繭絲織度を見るに、(青熟、パールを供試す)立木桑給與の場合幾分太き傾向ありたり。

(341) 桑樹の仕立方と蠶作及び蠶病との關係試験成績

西川砂 岐阜蠶報第3號 大正14年5月

芽桑採桑樹區、春切桑樹區、春秋兼用桑樹區、嫩葉摘上桑樹區とし、蠶品種は支101×日107及び日107×支101を供用し、7月17日に擲立てたるに繭絲織度は芽桑採桑樹區最も太く、春秋兼用桑樹區最も細し。

(342イ) 新梢育試験

和歌山縣蠶業試験場 和歌山縣蠶試報告第8號 大正15年3月

晩秋蠶期青熟×支9を用ひ、普通育と新梢育(發芽前伐採株の梢を晩秋蠶齡立30日前地上2尺5寸に切り新梢を伸す、その新梢にて飼育す)となす。繭絲織度は新梢育太し。

(342ロ) 桑樹の仕立方と蠶作との關係試験成績 第2報

西川砂 岐阜蠶試報第4號 大正15年5月

蠶品種は支4×日1とし、春秋兼用桑樹區、春切桑樹區、芽桑採桑樹區の3區としたるに、繭絲織度は3區間に大差なし。

(343) 全芽育及び新梢育試験

和歌山縣蠶業試験場 和歌山縣蠶試報告第9號 昭和2年7月

青熟×(支9×支101)を用ひ、對照區、全芽育、新梢育となす。繭絲織度は新梢育太く、對照區(普通育)最も細し。

## (344) 桑の仕立方と蠶の關係試験

前田義治、大八木實司、伊達實、倉光敬三 鳥取縣蠶試報第2號 昭和4年7月

供試蠶品種 歐7號×支7號、歐7號、支7號

試験區を根刈無拳式、中刈一季式、中刈無拳式、中刈三季式、高刈三季式を設く。

繭絲織度は高刈區稍々細く、他區は殆んど差異なし。

## (345) 桑樹仕立法の蠶兒發育に及ぼす關係試験

静岡縣蠶業試験場 静岡蠶績第19號 昭和6年3月

桑樹仕立法により夏秋蠶専用、春秋兼用、摘芯摘葉、摘芯無摘葉、夏秋蠶全芽の5區とし、桑品種は九葉十文字、收穫一とし、蠶品種は日107を供用せり。繭絲織度は最も太きは夏秋蠶専用區にして、最も細きは摘芯摘葉區なり。

## (346) 桑葉陰採の蠶兒發育に及ぼす關係試験

静岡縣蠶業試験場 静岡蠶試事績報告第19號 昭和6年3月

十文字、魯桑及芙蓉桑を用ひ、濫採區と標準區に分け、尙比較對照上便ならしめんがために對照區を設け、全齡間各種の桑品種を給與す。供試蠶品種は日107なり。繭絲織度は濫採區に於ては標準區に比し概して太き傾向あり。

## (347) 稚蠶用桑と蠶兒發育に關する試験

渡邊虎之助、林寛夫、田村巖 三重蠶試報第2號 昭和6年3月

## (1) 初秋蠶期

第1區 春期發芽前伐採後伸長せるもの。

第2區 春期發芽前伐採後伸長せるものを掃立25日前基部より61種で伐採。

第3區 春期發芽前伐採後伸長せるものを掃立30日前基部より49種で伐採。

第4區 春期發芽前伐採後伸長せるものを掃立35日前基部より30種で伐採

桑品種は改良鼠返、蠶品種は國富×浙江を用ひたるに、繭絲織度は第4,2區太く、第1,3區細し。

## (2) 晩秋蠶

春期發芽前伐採區と種々なる再發芽の方法を用ひ、桑品種は改良鼠返、蠶品種は支105×三重中集に付き試験せるに、繭絲織度は各區一定の傾向を認め難し。

## (348) 稚蠶用桑と蠶兒發育に關する試験

渡邊虎之助 外2氏 三重縣蠶試報第2號 昭和6年3月

秋期に於ては對照區、掃立25日前摘芯、30日前摘

芯、35日前摘芯のものにて(桑品種は改良鼠返、蠶品種は國富×浙江)繭絲織度に大差なし。

晩秋期に於ては對照區(發芽前伐採)、春蠶5齡期伐採、秋蠶掃立30日前摘芯し秋蠶に稚蠶桑を供したる後に伸長せる新葉、秋蠶掃立30日前摘芯し秋蠶用桑をとり、更にその基部を摘梢し伸長せる新葉、その他類似の2回摘梢法、或は摘葉法の6區を作りたるが(桑品種は改良鼠、蠶品種は支105×三重中集)、繭絲織度は對照區(春發芽前伐採)、秋蠶掃立30日前摘芯し秋蠶に稚蠶桑を供したる後伸長せる新葉を給與せるもの2區が稍々太く、概して秋蠶に摘葉したる後摘芯したる仕立法の區の繭絲織度は細い傾向がある。

## (349) 摘梢の葉質に及ぼす影響

大島顯三、松永實 石川蠶試報第5號 昭和6年3月

標準區、摘梢A區(掃立30日前)、摘梢B區(掃立20日前)、摘梢C區(掃立10日前)の3區別とし、日1×支4を用ひたるに、繭絲織度は標準區に比し摘梢せる區は何れも稍々太く、殊に摘梢A區は最も太きも他區との差僅少なり。

## (350) 初、晩秋稚蠶用桑仕立法試験

伊藤淳一 京都府蠶試報告第4號 昭和6年4月  
試験區

第1區 春蠶稚蠶使用、夏刈初秋使用後梢端剪除し、再發芽を晩秋使用。

第2區 春發芽前伐採7月上旬摘芯し、初秋、晩秋に使用。

第3區 春壯蠶使用、夏刈をなし、7月下旬摘芯し、晩秋使用。

第4區 春3,4齡迄に收葉、夏刈をなし、之を初秋、晩秋に使用。

第5區 春壯蠶收葉、夏刈を行ひ、之を初秋、晩秋に使用。

蠶品種は日110×昭白を用ひたるに、繭絲織度は第1區最も太く、第5,4區之に次ぎ、第3,2區細し。

## (351) 夏秋稚蠶用桑と蠶兒發育との關係試験

福島縣蠶業試験場 福島縣蠶試報告第3號 昭和6年4月

青熟を用ひ、稚蠶用桑を春秋兼用桑園、夏秋専用桑園、掃立30日前摘芯桑園の全葉、掃立20日前摘芯桑園の全芽より採りて試験せるに、繭絲織度は大差なきが、掃立20日前摘芯桑園全芽のもの幾分細き傾向あり。春秋兼用桑園のもの稍々太き傾向あり。

## (352) 夏秋蠶飼育上摘桑方法を異にせるものの成績



佐藤市兵衛、荒河修、宮本一誠 衣笠蠶報第297號 昭和6年5月

摘み下げ、摘み上げ、3齡まで摘み下げ、4齡より摘み上げ、對照の4區を設け、供試桑及び蠶品種は飼育時により異り、桑品種は新城錦、改良魯桑、九紋龍、改良鼠返を、蠶品種は浙江×綾白、日110×<sup>新1號</sup>浙江、日110×支102、日110×支103を供用せり。繭絲織度は摘み下げ區常に最も細く、他の3區には明確なる差異なし。

### (353) 春刈桑及び夏刈桑給與試験

平田治策 廣島蠶試彙報第3號 昭和6年11月

桑品種として改良魯桑を用ひ、蠶品種は廣新白×日110、和自を用ひ、全齡春刈、全齡夏刈、稚蠶春刈壯蠶夏刈、稚蠶夏刈壯蠶春刈の4區を比すれば、全齡夏刈、稚蠶春刈壯蠶夏刈區太く、稚蠶夏刈壯蠶春刈區最も細し。(夏期飼育)

### (354) 夏秋蠶稚蠶用桑育成試験

平田治策、細川軍三 廣島蠶試彙報第3號 昭和6年11月

支101×日110外2品種を用ひ、對照、摘梢、摘梢上半部摘葉、2回摘梢、摘梢全部摘葉に分ちたるに、繭絲織度は摘梢上半部摘葉區最も太く、對照區細し。

### (355) 葉質に関する試験

徳島縣蠶業試験場 徳島縣蠶試報告第6號 昭和6年11月

葉質鑑定法としてパンプロール法、比重法、肉眼鑑定法の3者を用ひ、その優良なりと認むるものにて飼育す。蠶品種は歐7×支7なり。

試験の結果繭絲織度は年により細太ありて、一定の傾向を見ず。

### (356) 春置桑樹に於ける新梢摘芯が葉質及び蠶に及ぼす影響

松本一二 他4名 愛知縣蠶試試験報告第4號 昭和7年3月

稚蠶用桑として赤木市平、壯蠶用桑として改鼠を用ひ、支4を供用し、對照區、摘芯區、稚蠶摘芯區、壯蠶摘芯區を設けたるに、繭絲織度は對照區太く、摘芯區細く、特に壯蠶摘芯區は細い。

### (357) 新梢の着位と蠶との關係

大須賀友衛 他2名 愛知縣蠶試試験報告第4號 昭和7年3月

支4を用ひ、稚蠶用赤市、壯蠶用和助十文字を用ひ、標準區(1枝條全葉)、上半區、下半區に分けて飼育したるに、繭絲織度は上半區は太く、下半區は

細い。

### (358) 晩秋蠶壯蠶用桑としての剪定立木桑給與試験

兵庫縣蠶試 兵庫蠶試報第5號 昭和7年3月

蠶品種は歐17×江白及び改良青熟×支105を用ひ桑品種として立木區は中間木、平治郎を、根刈區は改良魯桑、新城錦、改良鼠返を用ひたるに、繭絲織度は立木區太し。

### (359) 夏秋蠶稚蠶用桑に関する試験成績(豫備試験)

愛知縣蠶業試験場 愛知縣蠶業試験場印刷物 昭和8年3月

再發芽利用との關係

試験區を20日前摘梢區(掃立20日前に枝條の $\frac{1}{3}$ を摘梢す)30日前摘梢區、40日前摘梢區、50日前摘梢區とす。日107號×支101號を供試す。繭絲織度は秋蠶に於ては各區間に大差なし。晩秋蠶にありては標準區に於て稍々細く、摘梢各區に於て稍々太き傾向あり。

### (360) 夏秋蠶稚蠶用桑に関する試験成績(豫備試験)

愛知縣蠶業試験場 愛知縣蠶業試験場印刷物 昭和8年3月

收穫回数との關係

試験區を、二回摘探區、三回摘探區、四回摘探區、濫探區となし、日107號×支101號を供用せり。繭絲織度には各區間に大差を認めず。

### (361) 夏秋蠶用條桑の仕立法と蠶兒飼育との關係試験

山内眞樹 外3名 鹿兒島縣蠶業試験場報告第21號 昭和9年3月

供試蠶品種は支106×日110を用ひ、3齡まで同一方法にて飼育し、4齡期より試験區別にす。桑は改良鼠返を用ふ。試験區は對照區として春發芽前株直を行ひ、初秋蠶期に全長の6割を摘葉收穫蠶兒に供用し、晩秋壯蠶期先端20cmを残して摘葉收穫して蠶兒に與ふ。初秋摘葉晩秋條桑區として春發芽前株直を行ひ、初秋壯蠶期に全長の6割を摘葉收穫蠶兒に供用し、晩秋壯蠶期に全長の6割を伐採收穫し、蠶兒に給與す。初秋條桑晩秋條桑區として春發芽前株直を行ひ、初秋壯蠶期に全長の6割を伐採條桑にて收穫蠶兒に供用し、再發芽を晩秋壯蠶期に伐採收穫し、條桑にて蠶兒に給與す。以上3區を設けて試験の結果、織度に關しては初秋條桑晩秋條桑區最も太く、對照區最も細し。

### (362) 初秋蠶期の摘葉が晩秋蠶の作柄に及ぼす關係試験

伊吹豊、重柄瀬十郎 外2名 島根蠶試報告第23

號 昭和9年3月

春晩秋兼用甲區 全齡目的桑給與

春晩秋兼用乙區 壯蠶期目的桑給與

春初秋兼用甲區 全齡目的桑給與

春初秋兼用乙區 壯蠶期目的桑給與

日110×支105を用ひたるに、繭絲織度は春初秋兼用乙區最も太く、他は大差なし。

(303) 稚蠶用桑育成と葉質竝に蠶との關係試験

松本一二、星野正雄、田中格 他3名 愛知縣蠶業試験場報告第7號 昭和9年11月

1. 稚蠶用桑の桑育成との關係

國蠶日107號 試験區を對照區、摘梢區(掃立30日前條の先端4,5寸摘梢す) 全芽區(掃立30日前先端4,5寸摘梢し、更に上半部を摘葉し再發芽せしむ)の各區とす。繭絲織度は對照區太く、摘梢區、全芽區何れも細し。

2. 稚蠶用桑の育成と掃立早晚との關係

掃立の早晚により繭絲織度の細太を見るに、早掃にありては對照區稍々太く、摘梢區及び全芽區稍細き傾向あるも、晩掃にありては各區間に差異を認められず。

(304) 夏秋期壯蠶用條桑の育成方法が收葉量竝に蠶兒に及ぼす影響

山内眞樹、現玉園憲三 鹿兒島縣蠶業試験場報告第22號 昭和10年3月

夏秋期條桑用桑の育成法と蠶兒との關係

第1區(春刈標準)、第2區(春刈摘葉中間伐採)、第3區(春刈摘葉摘葉伐採)、第4區(春刈摘葉中間伐採)、第5區(春刈中間伐採)を設け、1,2齡期は赤市、3齡期は改良鼠返、壯蠶期も改良鼠返を用ひたり。蠶品種は初秋蠶期は日7×支106、晩秋蠶期は日110×支106を用ふ。織度は第3區或は第5區最も太く、第1區細き傾向あり。

(305) 夏秋期稚蠶用桑の育成法竝に育成全芽の調桑法が蠶兒に及ぼす影響

山内眞樹、現玉園憲三 鹿兒島蠶試報告第22號 昭和10年3月

1. 稚蠶用桑の育成法と蠶との關係

桑は改良鼠返を用ひ、初秋、晩秋共に日110×支106を用ふ。

(1) 夏秋蠶専用桑園の場合

初秋蠶期に全芽區、摘梢區、摘葉區、對照區を設けて試験す。其の結果を見ると、織度は全芽區最も太く、摘梢區最も細し。晩秋期には第1區(初秋全芽晩秋全芽)、第2區

(初秋全芽晩秋摘葉)、第3區(初秋全芽晩秋摘梢)、第4區(初秋摘梢晩秋摘葉)、第5區(初秋摘梢晩秋摘梢)、第6區(初秋摘葉晩秋摘葉)に對照區を設けて試験す。其の結果織度に関しては第3區最も太く、第4區、第5區、第6區之に次ぎ、第1區、第2區最も細し。

(2) 春秋兼用桑園の場合

全芽區、摘梢區、摘葉區に對照區を設けて試験せるに、織度は對照區最も太く、全芽區之に次ぎ、摘梢區最も細し。

2. 夏秋期稚蠶用桑として育成せる全芽の調桑法と蠶との關係

稚蠶期を第1區(1齡到桑3齡到芽3齡全芽)、第2區(1齡-3齡到桑)、第3區(1齡-3齡到芽)、第4區(1齡-3齡全芽)に分け、壯蠶は同様に全芽育とす。桑は改良鼠返を用ひ、蠶品種は初秋期、晩秋期共に日110×支106なり。織度は初秋期は第3區最も太く、第4區之に次ぎ、第2區、第1區の順に細し。晩秋期は第1區最も太く、第2區、第3區之に次ぎ、第4區最も細し。従つて一般的に見れば一定の傾向なし。

(306) 摘葉方法の如何が繭絲質竝に桑園收獲量に及ぼす關係試験

佐光喜一郎 京都府蠶試報第5號 昭和11年6月 蠶品種は初秋日110×支106、晩秋支106×日110を用ひ、試験區は

第1區 下向摘葉

第2區 上向摘葉

第3區 1,2齡は芽桑専用桑園より、以後第1區に準ず。

第4區 1,2齡は芽桑専用桑園より、以後第2區に準ず。

繭絲織度は初秋は第1區のみ細し。晩秋も同様。

其他抄録番號(136)(187)(313)(384)(414)参照。

飼育の(14)肥料の種類(綠肥、堆肥、人糞尿、蠶蛹、魚肥、大豆粕、硫酸、糠粕、鰾粕、鷄糞、石灰窒素、骨粉、智利硝石、磷酸肥料等)(實驗例9)

桑品種、飼育時期、蠶品種等により一定せずして判然たる傾向を示すものは殆どなきも、概して人糞尿、大豆粕、無磷酸肥料、堆肥等太き傾向あり。而して人糞尿、大豆粕は堆肥よりも太き傾向を示す。無肥料區は最も細し。尙硫酸も稍々細き傾向あるものの如し。

## (367) 桑樹肥料種類の菌質に及ぼす影響試験

茨城縣第2蠶試 茨城縣第2蠶試試験報告第1號  
大正14年10月

金肥區、綠肥區、堆肥區、雜肥區と4區別し、蠶品種は支4×日1を用ひたるに、繭絲織度は堆肥區概して太く、金肥區と綠肥區との間には大差なく堆肥區より稍々細し。

## (268) 肥料の種類と桑樹及び蠶との關係試験

近藤彦助、青野武雄 愛媛縣蠶試報告第21號 昭和5年3月

## 1. 肥料の種類と絲繭用蠶兒との關係

春蠶日1號×支4號、秋蠶× $\frac{\text{支4號}}{\text{支101號}}$ ×日107號を用ひし、試験區を金肥専用區、金肥自給肥併用區、自給肥専用區、無肥料區の4區とす。繭絲織度を見るに春は金肥自給肥併用區及び金肥専用區稍々太くして、無肥料區、自給肥専用區稍々細し。秋蠶に於ては金肥専用區最も太く、自給肥専用區之に次ぎ、無肥料區最も細し。

## 2. 肥料の種類と種繭用蠶兒との關係

春蠶支4號、秋蠶日107號を用ひ、試験區は1と同様なり。繭絲織度は春蠶にありては金肥専用區最も太く、自給肥専用區之に次ぎ、無肥料區及び金肥自給肥併用區稍々細し。秋蠶にありては金肥専用區、金肥自給肥併用區、自給肥専用區は大差なく無肥料區最も細し。

## 3. 肥料の種類と次代蠶との關係

春蠶に於て金肥専用區最も太く、他の區には大差なし。秋蠶にありては無肥料區最も太く、自給肥區、金肥専用區之に次ぎ、金肥自給肥併用區最も細し。

## (369) 飼料試験

高知蠶試 高知蠶試報第3號 昭和5年7月

## (1) 窒素質肥料を異にせる桑葉と蠶兒との關係

日1を用ひ、人糞尿、蠶蛹、魚肥、堆肥、紫雲英、大豆粕、硫酸アンモニアの7區としたるに、繭絲織度は春期は人糞尿區最も太く、大豆粕區、硫酸區之に次ぎ、魚肥區、堆肥區細し。次代は魚肥區、紫雲英區太く、蠶蛹區、大豆粕區細し。秋期は人糞尿區、蠶蛹區太く、堆肥區細し。次代は人糞尿區最も太く、大豆粕區、蠶蛹區之に次ぎ、紫雲英區最も細し。

## (2) 施肥用量を異にせる桑葉と蠶兒との關係

春支4、秋日107を用ひ、標準區、5割増區、10割増區、15割増區、5割減區、7割減區としたるに、繭絲織度は春は15割増區最も太く、10割區最も細

し。次代は7割減區稍々太きも其他にありては大差なし。秋は7割減區、標準區稍々太きも大差なし。次代は7割減區最も太く、5割増區最も細きもその差僅少。

## (3) 肥料3要素を異にせる桑葉と蠶兒との關係

春は日1、支4、秋は日107を用ひ、無窒素區、窒素11,25疋區、窒素18,75疋區、窒素26,25疋區、無燐酸區、燐酸11,25疋區、燐酸15疋區、無加里區、加里7,5疋區、加里15疋區とし魯桑を用ひたるに、繭絲織度は春は窒素11,25疋區、燐酸11,25疋區最も太く、加里15疋區細く、無加里區最も細し。秋は無燐酸區、燐酸11,25疋區太く、加里15疋區細きもその差異顯著ならず。

## (370) 夏秋蠶用桑に関する試験成績(豫備試験)

愛知縣蠶業試験場 愛知縣蠶業試験場印刷物 昭和8年3月

## 肥料の種類との關係

日107號×支101號。肥料の種類は、堆肥、大豆粕、鍊粕、人糞尿、鰵粕、鵝糞、石灰窒素の7種を試験區として設けたり。各區に葉肥として堆肥を施用し、加里の不足は藎灰にて、燐酸の不足は弧過燐酸石灰にて補足せり。其の試験成績を見るに、繭絲織度は秋及び晩秋蠶に於て各區間に一定の傾向を認め難し。

## (371) 蠶兒飼育試験

宮崎縣蠶業試験場 宮崎蠶試報告第2號 昭和8年3月

春は歐17×支14、晩秋は支105×歐17を用ひ、桑園肥料と蠶兒飼育成績との關係を調べた。

試験區は標準區、大豆粕區、堆肥區、骨粉區、綠肥區、人糞尿區、硫酸區、蠶蛹區、無肥料區とした。此の繭絲織度との關係を見るに、春と晩秋にてその細太の順位區々にして一定の傾向を見ず。

## (372) 速効性施肥秋蠶用桑の蠶兒、繭質並に桑樹の發育に及ぼす影響試験成績

岩手蠶試 岩手蠶試彙報第5號 昭和8年4月

標準、6月25日掃、7月5日掃、7月10日掃、7月15日掃の5區とせり。但し標準區以外は速効性肥料を施與したる桑葉を給與せり。蠶品種は日110×支105。繭絲織度は標準區と7月5日掃區太く、7月15日掃區最も細し。

## (373) 桑施用主肥料の種類と繭繭との關係試験

徳島縣蠶業試験場 徳島縣蠶試報告第7號 昭和9年3月

昭和5年は春 歐9×金黃、秋 支103×日110、晩秋

日110×支103。

昭和6年は春 畝9×金黃、秋 支105×日110、晚秋 日110×支105。

昭和7年は春 支4×畝16、晚秋 支106×日110。

昭和8年は春 日7、秋 日110×支106、晚秋 支106×日7。

桑品種は改良鼠返なり。

試験區は無肥料、堆肥綠肥、大豆粕智利硝石、大豆粕、魚肥、硫酸アムモニア、人糞尿、石灰窒素、無磷酸、無加里の各區とす。

繭絲織度を見るに

春は各區間に大差なけれども、無磷酸、無加里、大豆粕、堆肥綠肥、石灰窒素の各區太く、他區は細し。

秋は魚肥、硫酸、無磷酸區太く、無肥料區細く、他區は中間なり。

晚秋は各區間に大差なけれども、無肥料、硫酸、人糞尿區細く、大豆粕、無磷酸區太し。

尙道肥區と比較すれば道肥區太し。

是要するに無肥料區の細き傾向は確實なり。無磷酸、大豆粕等は太き傾向あり。其他は一定せず。

#### (374) 鶏糞施用桑の飼料の價値に関する試験

富秀雄、山口留一 長崎縣蠶業試験場報告第4號 昭和11年8月

試験區は稚蠶標準と稚蠶鶏糞とに分け、更に各々を壯蠶標準區、壯蠶鶏糞區に2分す。標準區とは堆肥、蠶沙、大豆粕、硫酸アンモニア、過磷酸石灰、硫酸加里を混合施肥せる桑を、鶏糞區とは堆肥、蠶沙、鶏糞(乾)、硫酸加里を混合施肥せる桑を給與せる區なり。桑は魯桑を用ひ、蠶品種は支106×日110、支106×日7、畝18×支16、日7×支106を用ふ。織度は稚蠶鶏糞壯蠶鶏糞區、稚蠶標準壯蠶鶏糞區の兩區太く、他區は之に反す。又稚蠶標準壯蠶標準區と稚蠶鶏糞壯蠶標準區との間には差異を認め難し。

其他抄録番號(282) 参照。

#### 飼育の(15) 施肥量 (實驗例9)

繭絲織度は概して多肥料區太く、普通區之に次ぎ、減量區又は無肥料區細し。

#### (375) 桑の肥料と蠶の發育關係に就て

岸田信治郎、田中泰二、前田義治、倉光敬三 鳥取蠶試報告第1號 昭和2年5月

畝7號×支7號、(支9號×支101號)×日106號、日106號、(支101號×支9號)×日107號を供試す。試験區を標準區、無肥料區、5割減肥區、5割増肥區、2倍

肥料區、窒素増肥區、磷酸増肥區、加里増肥區、石灰増肥區、綠肥増肥區の別とせり。

繭絲織度は無肥區、5割減肥區稍々細く、其他の區には大差なきも何れも前2區より太し。

#### (376) 施肥量を異にする桑葉と蠶兒發育との關係試験

静岡蠶試 同場事務報告 昭和6年8月

標準區は肥料成分3要素を標準量施肥し、倍量區は3要素全部倍量施肥し、窒素過用區は窒素のみ倍量施肥せり。

試験區別

第1區 標準區

第2區 稚蠶倍量區

第3區 壯蠶倍量區

第4區 全齡倍量區

第5區 稚蠶窒素過用區

第6區 壯蠶窒素過用區

第7區 全齡窒素過用區

春は支4を、秋は日107を使用せり。

繭絲織度は春は第3區最も太く、第6區最も細し。秋は春程大差なきも第3區、第7區最も太く、第6區最も細し。

#### (377) 夏秋蠶稚蠶用桑に関する試験成績(豫備試験)

愛知蠶試 愛知蠶試印刷物 昭和8年3月

施肥量との關係

試験區を對照區、半量區、倍量區の三區を設く。蠶品種は日107號×支101號を供用せり。繭絲織度は秋蠶、晚秋蠶に於て何れも各區間に大差なし。

#### (378) 窒素質肥料過用桑給與試験

重柄瀬十郎 外2名 鳥根蠶試桑報第22號 昭和8年3月

標準區、稚蠶期窒素過用區、壯蠶期窒素過用區、全齡窒素過用區に分ち、春は畝16×支13、晚秋は日110×支103を用ひたるに、繭絲織度は春期は全齡窒素過用區最も太く、稚蠶期窒素過用區之に次ぎ、他區は細し。晚秋期は稚蠶期窒素過用區、壯蠶期窒素過用區太く標準區最も細し。

#### (379) 施肥量を異にする桑葉の第5齡用桑としての價値並に養蠶經濟に及ぼす影響に就て

地引嘉作 熊本蠶試桑報第5號 昭和8年7月

蠶品種は支4×日1、純優白×純金黃、支7×畝7、支13×畝16を用ひ、その各々に付き多肥料桑、普通肥料桑、無肥料桑の3區に分ちて試験せり。繭絲織度は春、秋、晚秋を通じ概して多肥料區最も太く、普通肥料區之に次ぎ、無肥料區最も細し。

(330) 速效性窒素肥料多肥桑と飼育型式との關係

香川蠶試、香川蠶試試驗成績要録第2號 昭和9年3月  
桑品種として青市、改良魯桑、改良鼠返を、速效性窒素肥料として硫酸アンモニヤを用ひ、給桑型式として春は普通育、補濕育、全芽育、給桑減回區、秋は普通育、補濕育、給桑減回區としたるに、繭絲織度は給桑減回區の場合に限り、窒素多肥桑を給與したるものは普通桑を給與したるものよりも稍々太き傾向あるも、其他の飼育型式に於ては春秋蠶共一定の傾向を認め難し。

(381) 多肥料桑の蠶兒に及ぼす影響に關する研究

佐藤貞治、奥富富五郎 埼玉蠶試報告第27號 昭和11年3月

富榮桑を用ひ、無肥區、適肥區、多肥區に分ち、春、初秋、晩秋に互り稚蠶期、壯蠶期の兩期に分ち給與試驗せり。適肥區は硫酸9,4疋、過磷酸石灰3,8疋、硫酸加里2,3疋の割合に施し、多肥區はその倍量なりとす。蠶品種は春は歐17、他は日110を用ひた。繭絲織度は稚蠶期試験では無肥區最も太く、適肥區之に次ぎ、多肥區最も細し。壯蠶期試験にては春秋の平均では三者差異なきも、飼育時期別にみると春は三者殆んど差異なく、秋は適肥區、多肥區太く、無肥區細し。

(382) 多肥料桑の蠶兒に及ぼす影響試験

富秀雄、山口留一 長崎蠶試報告第4號 昭和11年8月  
試験區は稚蠶、壯蠶、全齡の各期を夫々無肥區、適量區、多肥區とに分ち、計9區とせり。桑品種は改良鼠返、魯桑(稚蠶區の壯蠶にのみ給與)を用ひ、蠶品種は支106×日110、支106×日7、日7×支106、支107を用ふ。織度は適量區最も太きも、多肥區は無肥區より太き傾向あり。而して稚蠶期に於ける影響は壯蠶期、或は全齡に於ける影響よりも少き傾向あるものの如し。

其他、抄録番號 (282)参照

飼育の(16)日照不足桑給與 (實驗例5)

繭絲織度は日照不足桑給與の場合に常に對照區より細し。

(383) 日蔭桑と蠶兒發育との關係試験

福島蠶試 福島蠶試報告第2號 昭和4年3月  
歐7×支7、日1×支4、日109×支102を用ひ、標準區と日蔭桑(1-3齡日蔭桑)とを作りたり。繭絲織度は常に日蔭桑區細し。

(384) 葉質と軟化病 (第1報)

片寄政之助 外4名 愛知蠶試試驗報告第3號 昭

和6年3月

1. 日照の多寡が桑の葉質及び蠶營養に及ぼす影響に付きては日107を用ひて試験せるに、日照防止區と標準區の間に繭絲織度に差を認めず。(桑品種ハツ房)
2. 桑葉の摘葉部位と蠶營養との關係に付きては、桑品種改良鼠返、蠶品種日107を用ひて試験せるに、標準區、中庸區、軟葉區、硬葉區、稚蠶軟葉區、稚蠶硬葉區に付きて見るに、繭絲織度は秋蠶第1期に於ては軟葉太く、秋蠶第3期に於ては標準區が太い。
3. 春夏秋蠶兼用桑と夏秋蠶専用桑の蠶との關係にては、和助十文字、改良鼠返を日107に給與したるに、繭絲織度に一定の傾向なし。
4. 桑の品種と蠶營養との關係にて赤市、大葉、收穫一、改鼠、和助十文字、ハツ房を用ひ、日107號に給與したるに、繭絲織度に於ては大差なけれども、ハツ房稍々太く、大葉稍々細き傾向あり。
5. 摘葉回数と蠶營養との關係に於ては和助十文字を日107に給與し、1,2期摘葉區、1期摘葉區、無摘葉區と分ちたるに、繭絲織度は1期摘葉區のみ細し。

(385) 葉質の糖解舒に及ぼす影響

片寄政之助 外4名 愛知蠶試試驗報告第4號 昭和7年3月

日107を秋期飼育したり。其の繭絲織度は、

1. 日照度を異にする桑葉(ハツ房)にては標準區は日照防止區に比し繭絲織度太い。
2. 硬軟度を異にする桑葉(改鼠、春夏秋兼用)では軟葉區太く、硬葉區細し。
3. 用途別桑にては兼用區の繭絲織度太く、専用區少い。
4. 桑品種では大差ないが、大葉細く、ハツ房太い。

(386) 夏秋蠶兼用桑に關する試験成績(豫備試験)

愛知蠶試 愛知蠶試印刷物 昭和8年3月

日射量との關係

日107號×支101號試験區を覆蓋區、及び對照區の2區とし、覆蓋區は掃立15日前より試験區の周圍及び上部に支柱を立て芦簾を張りたり。繭絲織度は對照區稍々太き傾向あり。

(387) 日照不足の場合に於ける速效性窒素質肥料の施與が桑葉の窒素成分に飼料的價值に及ぼす影響

五十期正平 日本蠶絲學雜誌5の2 昭和9年5月  
桑品種は多胡早生を用ひ、試験區を分ちて標準施肥區、特別施肥區、標準施肥覆蓋區、特別施肥覆蓋

區としたるに、繭絲織度は覆蓋區細く、標準施肥覆蓋區最も細し。

**飼育の(17) 特殊飼料(乾燥桑、冷蔵桑、藥劑撒布桑、降灰桑、柘葉、病桑、濡桑、凍害桑、泥桑、旱害桑等) (實驗例17)**

概括すれば普通桑を給與した場合に比し、是等特殊飼料を與へた場合は繭絲織度細くなる。

(388) 害蟲驅除液撒布桑葉給與試驗

明石弘 外2名 東蠶 蠶事報告第29號 明治39年12月

青熟蠶兒2眠起蠶を用ふ。石油乳劑區(20倍稀釋液)と標準區とに分けて試験す。石油乳劑區は撒布後1時間經過後摘採給與し、次回給與時にも該葉を與へ、以後普通桑を以てす。織度は石油乳劑區は標準區より太し。

(389) 乾燥桑葉給與試驗

横田長太郎 外2名 東蠶 蠶事報告第29號 明治39年12月

1. 十文字桑の葉を150°F—170°Fの溫度(蒸氣乾燥裝置)を以て乾燥せるもの(甲)及び生葉を蒸氣を通して之を蒸したる後、甲と同様に乾燥を行ひたるもの(乙)の2種の桑葉を作り、各々を全齡給與、1齡給與、2齡給與、4齡給與、5齡給與の5區に分けて給與し、別に標準區を設く。蠶品種は二化性第二期の新屋を用ふ。織度は標準區最も太く、2齡給與乙區之に次ぎ、5齡給與甲區最も細く、5齡給與乙區、4齡給與乙區、2齡給與甲區概して細し。而して甲、乙の差なきもの如し。

2. 魯桑葉を以て1と同一の方法によりて試験す。但し2齡中期後給與區1區を増す。蠶品種は小石丸なり。織度は2齡中期後給與區、1齡給與乙區標準區より稍々太く、5齡給與區は2區共特に細し。而して甲區は乙區より稍々太き傾向あり。

(390) 桑葉の水分と秋蠶飼育との關係

加藤新平 東蠶試驗報告第47號 明治45年6月  
日本錦を用ひ、甲區(水分發散せざるもの)、乙區(水分1割發散)、丙區(水分2割發散)、丁區(水分3割發散)の4區に分ちたるに、繭絲織度は水分發散多きもの程織度細し。

(391) 燒岳降灰を給與したる蠶の虛弱性遺傳

長野縣第2原蠶種製造所事績報告第2號 大正3年3月

蠶品種は新屋を用ひ、試験區は

標準區 噴出灰を給與せざるもの。

洗滌給與區 2—4齡期間各齡2日間1日3回給與

するもの。

隔日給與區 2—5齡期間隔日に1日3回給與するもの。

4齡中給與區 4齡齡中毎回給與するもの。

5齡中給與區 5齡齡中毎回給與するもの。

毎回給與區 2齡以後上炭迄毎回給與せるもの。

原蠶繭絲織度は概して降灰桑給與期間長きに従ひ細くなる。次代蠶に於ては5齡中給與は太きも概して降灰桑給與期間長きものは細し。

(392) 柘葉給與試驗

梅澤博昌、中森隆太郎 松本原蠶蠶事報告第2號 大正11年2月

供試蠶品種は日本錦、アスコロピテチノ及び兩者の交雜種を用ひた。標準區、3齡迄柘葉以後桑葉給與區及び全齡柘葉給與區の3區としたるに、繭絲織度は概して全齡桑葉給與區太く、稚蠶柘葉壯蠶桑葉區之に次ぎ、全齡柘葉給與區最も細し。

(393) 萎縮病桑葉給與試驗

梅澤博昌 外1名 松本原蠶蠶事報告第2號 大正11年2月

第1區(健康給與)、第2區(全齡病桑)、第3區(4齡迄病桑)、第4區(3齡迄病桑)、第5區(2齡迄病桑)、第6區(1齡病桑)、第7區(2齡より病桑)、第8區(3齡より病桑)、第9區(4、5齡病桑)、第10區(5齡病桑)の10區とし日本錦を用ひたるに、繭絲織度は第1區特に太く、他は大差なきも、第9區、第4區、第6區、第7區之に次ぎ、第2區、第8區、第10區細し。

(394) 燒岳降灰の添食が蠶兒に及ぼす影響に就て

酒井文三郎 長野蠶試驗報告第1號 大正15年3月  
正白、正白×新白を用ひ、灰を5%内外添加せるもの、灰を添加し後掃落したるもの、灰を添加し清水にて洗ひたるものを作り、添食時期、期間の相異等詳細に試験せるに、繭絲織度は灰を添加せるもの程細く、添加量少なければ細くなる程度も少し。

(395) 春蠶期に於ける貯藏桑芽により稚蠶飼育試験

岩手蠶試 岩手蠶試報告第12號 昭和4年3月  
市平を用ひ、對照區(普通桑)、短期貯藏區(地下室7日貯藏桑)、輸送桑芽貯藏區(神奈川縣平塚よりの輸送桑を地下室3日、冷蔵庫8日、地下室6日貯藏)とし日1を飼育す。繭絲織度は輸送桑芽貯藏桑區が細し。

(396) 秋蠶期に於ける冷蔵桑芽給與試驗

岩手蠶試 岩手蠶試報告第12號 昭和4年3月  
福島大葉及び鶴田を供用す。冷蔵は39日間なり。日107を飼育す。繭絲織度は冷蔵區細し。

(397) 溜桑に関する試験

徳島蠶試 徳島蠶試報告第5號 昭和4年3月  
支7×歐7、日1×支4を用ひ、5齡期種々の程度に溜桑を給與せり。繭絲織度は支7×歐7では溜桑給與回数多き程細きも大差なし。日1×支4では對照區(溜桑なし)が細し。要するに繭絲織度に大差なし。

(398) 昭和5年凍害桑給與試験

山本常次 埼玉蠶試彙報第8號 昭和6年3月  
全齡被害桑給與、稚蠶被害桑給與、壯蠶被害桑給與、無被害桑給與の4區別とし、蠶品種は支4號にして春期飼育をなしたるに、繭絲織度は全齡被害桑給與區最も太く、壯蠶被害桑給與區之に次ぎ、無被害桑給與區最も細し。

(399) 水害泥桑給與試験

河田和一 京都蠶試報告第4號 昭和6年4月  
(1) 初秋期委託分場に於ける試験  
普通桑給與區、5齡初期泥桑區、5齡中期泥桑區、5齡末期泥桑區、5齡全期泥桑區、5齡全期泥桑水洗區に分ち、那足製1,2化交雜種を飼育したるに、繭絲織度は普通桑區最も太く、5齡初期、中期、末期と次第に細く、5齡全期泥桑區最も細し。

(2) 晩秋蠶期本場に於ける試験

歐17×昭白を用ひ、全齡普通桑區、1齡泥桑區、2齡泥桑區、3齡泥桑區、4齡泥桑區、5齡泥桑區、全齡泥桑區、5齡初期泥桑區、5齡中期泥桑區、5齡末期泥桑區、5齡全期泥桑水洗區に分ちたるに、繭絲織度は5齡泥桑區最も太く、1齡泥桑區之に次ぎ、全齡泥桑區細し。

(400) 桑葉の摘採時期と給與時期との關係試験

大分蠶試 大分蠶試事績報告第14號 昭和6年11月

新鮮區、半日後給與區、1日後給與區とし、蠶品種は日107、支101、支4を用ひ、桑品種は改良赤芽魯桑、改良鳳返を用ひたり。

繭絲織度は1日後給與區最も太く、半日後給與區最も細し。

(401) 桑木虱被害桑給與試験

久本徳夫、野口武 愛媛蠶試彙報第3號 昭和9年5月

桑品種として魯桑を、蠶品種として歐17×支105、支106×歐18を用ひ、標準區(壯蠶魯桑の普通桑給與)、桑木虱被害桑給與區(壯蠶期給與)の2區別としたるに、繭絲織度は桑木虱被害桑區細し。

(402) 早害桑に成分補給が蠶兒に及ぼす影響

味岡秀夫、十萬五良 鹿兒島蠶試報告第22號 昭

和10年3月

早害を被れる桑に各種藥品及び食用品の添食が蠶兒に及ぼす影響を知らんとして試験せり。

1. 稚蠶期(1—2齡)添食の場合

A. 藥品添食の場合

支106×日7を用ひ、第1區(グリコース添食)、第2區(サツカロース添食)、第3區(ガキストリン)、第4區(氷豆腐)、第5區(氷豆腐とサツカロース)、第6區(アルコール)、第7區(氷醋酸)、第8區(蒸溜水)、第9區(對照區)を設けて試験す。3齡以後は普通育とす。その結果織度を見るに、第7區及び第4區最も太く、第6區は最も細し。最太と最細との差は顯著なり。

P. 食品添食の場合

支106×日7を用ひ、第1區(葡萄酒)、第2區(燒酎)、第3區(わかもと)、第4區(片栗粉)、第5區(どりこの)、第6區(蒸溜水)、第7區(對照區)を設けて試験す。その結果織度は第1區、第2區最も太く、第4區最も細し。

2. 壯蠶期(4齡以後)添食試験

支106×日110を用ひ、3齡までは普通育とす。

第1區(燒酎)、第2區(どりこの)、第3區(片栗及び氷豆腐)、第4區(片栗)、第5區(氷豆腐)、第6區(小麥粉)、第7區(清水)、第8區(無早害桑)即ち對照、第9區(早害桑)即ち對照を設けて試験す。其の結果織度は第8區は特に太く、第1區之に次ぐ。第7區及び第9區は最も細し、最太と最細との差顯著なり。

以上の外抄録番號(271)(201)參照

飼育の(18)刺戟劑接觸(煙、色光線、レントゲン、オゾン、紫外線、炭酸瓦斯等)(實驗例10)

何れも繭絲織度の太細と一定の關係を認め得ざれども、炭酸瓦斯濃度高き程繭絲織度は細くなる傾向あり。

(403) 煙の原鹽に及ぼす關係試験

辻暢太郎、藤崎卓爾 東蠶講習所蠶事報告第19號 明治36年3月

小石丸を用ひ、標準區と煙中區とに分けて試験せるに、織度に於ては煙中區は標準區よりは極めて微かに太し、而して織度偏差も大なり。

(404) 光線試験

田邊傳太郎 外4名 京都蠶講試驗成績第24號 明治45年3月

小石丸を用ひ、春期蠶兒を無色、赤色、黄色、青

色、紫色、黒色の下にて飼育したるに、繭絲織度は概して青色區最も太く、赤色區、黄色區之に次ぎ、無色區最も細し。

秋期い形種にては無色區、黄色區太く、赤色區最も細し。

#### (405) 蠶とレントゲン放射線との關係試験

田中福雄、大石久雄 長野縣松本原蠶種製造所蠶事報告第2號 大正11年2月

日105及び日105×アスコロピチエノを用ひ、標準區の外、産卵後3日日、5日日、7日日、9日日、10日目にレントゲン線に10分及び20分間放射したるに、繭絲織度と一定の關係なし。

#### (406) オゾンの蠶兒に對する影響に就て

福島縣蠶業試験場 福島縣蠶試報告第1號 昭和2年3月

日1×支4、日107×(支4×支101)を用ひ試験せるに、オゾンと1齡期に與へたるもの繭絲織度太く、次は1—2齡オゾンと與へたるもの太く、次は1—3齡オゾンと與へたるものにして、對照區は最も細い。

#### (407) 紫外線放射に関する試験

鹿児島縣蠶業試験場 鹿児島縣蠶業試験場報告第3號 昭和4年3月

##### 1. 蠶卵及び蠶兒放射試験

イ、日107×支4を用ひ、次の8區の試験區を設く。即ち第1區(催青卵放射蠶兒に放射せず)、第2區(催青卵放射2齡盛食期に1回放射)、第3區(催青卵放射4齡盛食期1回放射)、第4區(催青卵放射2齡、4齡、盛食期各1回放射)、第5區(2齡盛食期1回放射)、第6區(4齡盛食期1回放射)、第7區(2齡及び4齡盛食期各1回放射)、無放射區なり。織度は第6區は2,69デニールにして最太、第5區は2,46にして最細、他區は2,50—2,59にして大差なきが如し。

ロ、春期日1號を用ひ。試験區は放射距離により30種、50種、80種に分け、更に各々を放射時間により5分間區、10分間區、20分間區、30分間區に分つ。尙對照區として無放射區を設く。織度は、80種20分間區最も太く、50種10分間區最も細し。而して是等の間には大差を認められず。

ハ、秋期支101を用ひ、第1區(催青着手より點青迄毎日1回放射)、第2區(催青着手より孵化前日迄毎日1回放射)、第3區(點青より孵化前日迄毎日1回放射)、第4區(孵化前日1回放射)、第5區(無放射)、第6區(催青中無放射蠶兒各齡1回放

射)の5區を設く。卵は60°F低温催青をせるものなり。織度は第4區、第5區、第6區共に太く、他區は何れも稍々細し。

##### 2. 蠶卵放射時期試験

春期日1號を用ひて試験す。試験區は第1區(催青着手より反轉期迄毎日1回放射)、第2區(反轉期直前1回放射)、第3區(反轉期直後より孵化前日迄毎日1回放射)、第4區(孵化前日1回放射)、第5區(催青着手より孵化前日迄毎日1回放射)、第6區(無放射)を設く。織度は第1區最も太く、第4區最も細し。されど是等の間には大差なし。

##### 3. 催青法と放射との關係試験

春期支101を用ひ、高温催青區(78°F)と平進催青區(73,4°F)とに分け、夫等を放射時期により更に細分して試験す。織度は高温催青區に於ては催青中放射せずして蠶兒各齡毎日1回區は殊に細きも、他の各區には大差なし。平進各區に於ては無放射區殊に細きも、他區間には大差なし。

##### 4. 蠶兒放射時期試験

秋期支4を用ひ、第1區(稚蠶期光源より50種の距離にて5分間毎日1回放射)、第2區(壯蠶期同上)、第3區(全齡同上)、第4區(稚蠶期50種20分間毎日1回放射)、第5區(壯蠶期同上)、第6區(無放射)、第7區(熟蠶に1回50種5分間放射)に分つ。試験の結果織度は第4區最も太く、第3區最も細きも大差なきものの如し。

##### 5. 蠶兒放射用量試験

イ、春期日1を用ひ、上記1の(ロ)と同一の試験區を設けてなす。織度は50種5分間區特に太く、30種30分間區最も細し。而して30種區は50種區、80種區より細き傾向あり、而も一般的には對照區より稍々細き傾向あるものの如し。

ロ、秋期支1を用ひ、試験區は第1區(全齡毎日1回50種5分間放射)、第2區(同上50種10分間放射)、第3區(同上80種5分間放射)、第4區(同上80種10分間放射)、第5區(同上80種20分間放射)、第6區(無放射)、第7區(熟蠶に1回放射)の7區を設く。織度は第4區最も太く、第2區之に次ぎ、第6區最も細きも、各區間の差大ならず。

##### 6. 各齡放射時期試験

供試蠶品種は日1なり。試験區は毎日1回放射區、各齡餉食期1回放射區、各齡中食期1回放射區、各齡盛食期1回放射區、各齡眠中1回放射區、無放射區の6區を設け秋期に試験す。織度は對照區なる無放射區最も太く、毎日1回放射區特に細し。



他區はその差大ならず。

#### 7. 紫外線遮断試験

秋期日107×支4を用ふ。試験區は第1區(稚蠶期紫外線遮断壯蠶期普通育)、第2區(稚蠶期普通育壯蠶期紫外線遮断)、第3區(全齡間紫外線遮断)、第4區(稚蠶期全光線遮断壯蠶期普通育)、第5區(稚蠶期普通育壯蠶期全光線遮断)、第6區(全齡間全光線遮断)、對照區(普通育)の7區を設く。紫外線遮断とは紫外線遮断(眼鏡ウルトラゼン)を飼育函蓋にはめこみ飼育す。

織度は對照區最も太く、第5區、第4區、第1區之に近く、第2區最も細く、第6區、第3區之に近く、最太と最細との差顯著なりと認む。

#### 8. 飼料放射試験

イ、春期日1を用ひ、嫩軟葉、普通葉、硬葉或は萎縮病葉を摘採し、之を放射或は無放射で稚蠶期、壯蠶期或は全齡間給與したる場合に、織度は稚蠶期に放射せる普通葉を給與せるもの最も太く、同じく放射せずに給與せる場合、稚蠶期に嫩軟葉放射のもの給與せる場合は稍々太く、粗硬なる葉を放射し全齡給與せる場合は特に細く、他は大差なきが如し。

ロ、秋期支4を用ひ、全齡間軟葉、中葉、硬葉を毎日初回の給養時にもみ給與、或は無放射にて給養飼育の場合に、織度は全齡間中葉を無放射にて給與の場合が特に太く、全齡間軟葉に放射し毎日初回の給養時にもみ給與の場合は最も細し。而して硬葉及び軟葉區は放射葉給與の方細く、普通葉區は之に反せる傾向あり。

#### (408) 紫外光線の蠶に及ぼす影響試験

岡田輝彦 山梨縣蠶試報告第1號 昭和5年2月

##### 1. 紫外光線桑葉放射試験

秋蠶期に於て日107を以て飼育し、桑葉の夕放射區と標準區(無放射)に分け、又晩秋蠶期にては日107×秋光、秋光を以て朝放射區、朝標準區、夕放射區、夕標準區に分けて試験す。尙又秋期に前代紫外線桑葉放射を分けて放射區と標準區とし、次代蠶が如何なる關係にあるかを試験す。蠶品種は日107なり。

織度は秋期に於ては兩區とも同一であり、晩秋期にては夕放射區、夕標準區細く、朝放射區、朝標準區太し。尙又次代蠶試験の織度にては放射區の方太し。

##### 2. 紫外光線蠶卵放射試験

秋期に於ては前期放射區(反轉期放射)、後期放射

區(反轉期後放射)、冬期放射區(催青中を通じて)標準區(無放射)となし、晩秋期にては前代紫外線放射區を分け放射區と標準區とす。翌年春に於て蠶卵放射を前期放射、後期放射、冬期放射、標準區と定めて試験す。供試蠶品種は秋、晩秋は日107、春は日110なり。

織度、秋期にては放射區は何れも標準區より細く、中でも冬期放射區最も細く、前期放射區之に次ぎ細し。晩秋期に於て次代蠶の影響を見るに、當代放射區は當代標準區より稍々太し。

#### (409) 紫外線の養蠶上に及ぼす影響試験

高知蠶試 高知蠶試報第4號 昭和6年7月

##### (1) 蠶種放射試験

支4、支108を用ひたるに、繭絲織度は放射したるものは、せざるものに比し細し。

##### (2) 蠶兒放射試験

(1) と同一蠶品種を用ひたるに、繭絲織度は放射したるものと、放射せざるものとの間に概して差異なし。

##### (3) 桑葉放射試験

(1) と同一蠶品種を用ひ、桑品種は市平、甘樂桑を用ひたるに、放射桑葉を給與したるものと、然らざるものとの間に繭絲織度に差異を認め難し。

#### (410) 紫外線放射に関する試験

山中徳三郎、味岡秀夫、羽生貞秋、堀之内綱雄  
鹿兒島縣蠶試報告第4號 昭和6年8月

##### 1. 蠶卵胚子反轉期放射の影響試験

歐7、日1、日107、支101を用ひて試験せるに、春に於ては放射區太き傾向あり。秋に於ては差異なし。

##### 2. 蠶兒放射試験

日1、支4を用ひ、放射時期、放射距離を異にした場合、織度は飼育時期、蠶品種によりて一定の傾向顯著ならざれども、4、5齡盛食期1回放射區概して太き傾向あるもの如し。

##### 3. 飼料放射試験

軟葉、中葉、硬葉の3區に分け、更に是等を無放射と放射との2區に分け、日1、支4を用ひて試験す。織度は放射せる區の方稍々太き傾向あり。

##### 4. 紫外線の蠶卵、蠶兒放射が蠶兒の發育、繭質との關係試験

蠶品種は春は歐16×支14、秋は歐17×支14を用ひ蠶卵放射區、蠶兒放射區、無放射區とに分けて試験せる場合に、織度は蠶卵放射區最も太く、他區間には差異を認め難し。

##### 5. 1化性夏期飼育と紫外線放射との關係試験

供試蠶品種は日1、支4、日1×支4、支7、歐7、歐7×支7を用ひ、放射區と無放射區とに分つ。織度は品種により異り、歐7×支7、歐7、支7、日1は放射區稍々太く、其他の蠶品種は之に反す。

#### (411) 蠶の發育に及ぼす炭酸瓦斯の影響

中村徹 岡山縣蠶試報第3號 昭和10年3月

(1) 1,2齡間を各種濃度の炭酸ガスを含むせる空氣中にて飼育せる成績

春期試験區は標準區の外空氣内含有CO<sub>2</sub>ガスの百分率により100區、200區、300區、400區、500區に分ち、歐16×支14を用ひて試験せるに、繭絲織度は100區最も太く、標準區之に次ぎ、400區最も細し。概してCO<sub>2</sub>ガス含有率多きに従ひ織度細し。

(2) 1,2,3齡間を各種濃度の炭酸ガスを含むせる空氣中にて飼育せる成績

春蠶期に(1)と同一蠶品種を用ひ、同一區分をなしたるに、繭絲織度は概して炭酸ガス含有率多きに従ひ織度細し。

晩秋期に日110×支105を用ひ、標準、50區、100區、150區、200區、250區、300區としたるに、繭絲織度は150區、200區最も太く、250區、100區細し。

(3) 4,5齡間を各種濃度の炭酸ガスを含むせる空氣中にて飼育せる成績

春蠶期に歐16×支14を用ひ、(1)同様試験區に分ちたるに400區最も太く、標準區之に次ぎ、500區最も細し。

#### (412) 赤外線燈照射が織度に及ぼす影響に就て

高瀬軍治 和歌山縣蠶試報告第14號 昭和10年5月  
110ボルト、300ワットの赤外線燈を用ひたり。繭絲織度は卵に照射すれば、背フィルター又は無色區の織度太く、卵殻に照射又は5齡蠶に照射せる場合にも概ね同様の傾向あり。

#### 飼育の(19) 電燈照明育 (實驗例13)

電燈照明區と對照區との間には繭絲織度に關し差を認めず。

#### (413) 電照育試験

岩手縣蠶業試驗場 岩手縣蠶試報告第14號 昭和5年3月

歐7、日1×支4を用ひ、電照育(飼育中、上簇中の夜間照明)と對照區を作る。繭絲織度に差異なし。

#### (414) 蠶に関する試験

滋賀縣蠶業試驗場 滋賀縣蠶試事績報告第19號 昭和5年

#### 1. 光線の過不足桑との關係

支13號×歐16號(春)、日110號×新浙江(夏)。試験區を光線照射區(晝間は自然に放置、夜間は周圍を天幕にて被ひ、晝光色電燈を點火す)、光線不足區(晝間は上部周圍を天幕にて被ひ、夜間自然状態に放置す)及び標準區とす。繭絲織度は春、夏共光線不足區に太く、標準區、光線照射區大差なく、前者より細し。

#### 2. 伐採時期並に收穫回数に異にせる桑葉と繭絲織度との關係

供試品種、新浙江×日110號、試験區を次の如くせり。

第1區 春蠶期に使用伐採せるものを秋蠶期にのみ使用。

第2區 春蠶期に使用伐採せしものを夏蠶期に枝條の $\frac{1}{2}$ を摘採し秋蠶期に使用。

第3區 彼岸刈せしものを夏蠶期に枝條の $\frac{2}{3}$ を摘採し秋蠶期に使用。

第4區 彼岸刈せしものを夏蠶期に於て先端3、4葉を残して摘採し秋蠶期に使用。

第5區 彼岸刈せしものを秋蠶期にのみ使用。

繭絲織度は第3區最も太く、第2區、第1區、第4區の順に次ぎ、第5區最も細し。

#### 3. 送風機使用と繭絲織度との關係

日110號×新浙江(夏)、支105號×歐17號(夏)、日110號×新浙江(秋)、送風機は給桑1時間及び無風状態の時蠶架と平行に送風し、上簇後は24時間連續回轉せり。送風機使用區を試験區とし、使用せざるを標準區とし試験せるに、繭絲織度は試験區は標準區に比し織度太し。

#### (415) 家産の電燈照明の効果に就て

篠原善次、三輪輔 蠶絲學雜誌第2卷第2號 昭和5年5月

支4×正白を用ひ、試験區を標準區(50燭光の作業燈)、第2區(ガス入養蠶ランプ(60ワット))、第3區(60ワットのカナリヤランプ)、第4區(60ワットの黄色ガス入ランプ)、第5區(50燭光のカナリヤBランプ)、第6區(60ワットの淡黄金ランプ)、第7區(60ワット濃黄金ランプ)、第8區(無照明區)に分けて試験せるに、織度に於ては第5區最も太く、第7區最も細く、第8區之に次ぎ、他區間には差殆どなし。

#### (416) 黄色電燈と蠶兒發育との關係試験

静岡縣蠶業試驗場 静岡蠶績第19號 昭和6年3月  
100ボルト60ワットの養蠶用ランプを用ひ、初秋及び晩秋の2回試験せり。供試蠶品種は前者は支102

×日110、後者は日107×浙江を用ひたり。

試験區

第1區 普通色30ワット1燈點燈

第2區 普通色60ワット3燈點燈

第3區 黄色60ワット3燈點燈

繭絲織度は第1回試験では第2區最も太く、第1區之に次ぎ、第3區稍々細し。第2回試験では第1區最も太く、第3區最も細し。

(417) 電燈照明が蠶に及ぼす影響

大八木實司、伊達實 鳥取縣蠶試報第4號 昭和6年5月

支13號×歐16號、大山×千代、大山×支105號を供試し、對照育、稚蠶電照育、壯蠶電照育、全齡電照育の4區を設く。繭絲織度を見るに、春蠶にありては電照各區に於て稍々太き傾向あり、秋及び晩秋にありては各區間に大差なし。

(418) 電燈照明飼育試験

徳島縣蠶業試験場 徳島縣蠶試報告第6號 昭和6年11月

支103×日110、日110×支102を用ひ、カナリヤ電球60ワット夜間照明區と對照區とを設けたり。繭絲織度は對照區太く、照明區細き傾向あり。

(419) 電燈照明育試験

大分蠶試 大分蠶試事報第14號 昭和6年11月

對照A、對照B、食桑中照明A、同B、小食期照明、催眠期照明、夜間照明、絶食中照明等の各區に付きて日110×支103を用ひて試験せるに、繭絲織度と電燈照明との關係明ならず。

(420) 電光照明育試験

古性淺次郎、大友安太郎 秋田蠶試 蠶試報告第8號 昭和7年4月

40燭光の蠶光電球を用ひ、稚蠶期照明區、壯蠶期照明區、全齡照明區、不照明區を作りたり。蠶品種は春は支4×日1、秋は日107を用ひたり。飼育温度は春は23°6内外、秋は26°4—26°8内外にて試験區間に大差なし。飼育湿度は春は70%、秋は81%内外にて各區間に大差なし。

繭絲織度は春に於ては照明區細く、秋には一定の傾向なし。

(421) 電燈照明育試験成績

長野蠶試 長野蠶試集報第28號 昭和7年7月

(1) 依託試験

對照區と照明區に分ち、蠶品種は支4×正白、信濃歐白×昭和、日1×支4、歐9×正白、歐9×青熟、歐9×支4、歐9×日110を用ひた。繭絲織度は對照、

照明2區間に差異なし。

(2) 試験場試験

蠶品種は支4×正白(春)、信濃歐白×昭和(夏)、日新×昭和、信濃歐白×昭和(晩秋)を用ひ、普通量給與、5割増給與、稚蠶照明普通量給與、稚蠶照明稚蠶5割増、壯蠶期及び上簇中照明普通量給與、壯蠶期及び上簇中照明壯蠶5割増給與、全齡化蛹迄照明普通量給與、全齡化蛹迄照明全齡5割増給與、上簇中照明普通量給與の9區別したるに繭絲織度は一定の傾向を示さず。

(422) 電燈照明飼育試験

水野保、大關豊 茨城蠶報第4號 昭和7年7月

(イ)黄色電燈照明區、(ロ)普通電燈照明區、(ハ)無照明區の3區とす。照明は60ワット電球による。

春期には飼育温度は(イ)23°20、(ロ)23°30、(ハ)23°10にして、繭絲織度は各區間に差なし。

秋期には飼育温度は(イ)27°10、(ロ)27°20、(ハ)27°10にして繭絲織度に差なし。

晩秋期には飼育温度は(イ)24°10、(ロ)24°20、(ハ)24°30にして、繭絲織度は各區間の差極めて少し。

(423) セロファン應用光線試験

和歌山縣蠶業試験場 和歌山縣蠶試報告第19號 昭和8年5月

支14×歐16を用ひ、對照區、赤色セロファン區、無色セロファン區を設けたり。繭絲織度はセロファン區は2區共太い。

(424) 電燈照明有色セロファン應用光線試験

高瀬軍治、濱中嘉之 和歌山蠶試報告第14號 昭和10年5月

支100×分離白1號にて試験せるに、對照區に比し赤、青、黄セロファン區は何れも繭絲織度太し。

以上の外抄録番號 (152)

飼育の(20)蠶病豫防劑撒布(石灰、醋酸、フォルマリン、燒碱、木灰、干草、ニンニク、ネオビーロン、クワイト) (實驗例11)

醋酸、フォルマリン撒布は繭絲織度を細くするも、其他の藥劑撒布の場合は對照區と差を認めず。

(425) 石灰撒布試験

田中福雄 外1名 松本原蠶試事報告第2號 大正11年2月

夏蠶期に日本錦を用ひ、石灰撒布と靱糠撒布に分ち、その各々を撒布法により給桑毎區、間雑區(石灰區では間雑代用區)、除沙毎區、餉食前區に分ちたるに、繭絲織度は石灰區と靱糠との間に差を認め

難く、全體としては石灰間雑代用區、石灰除沙毎區太く、石灰餉食前區最も細し。

(426) 白癩病豫防の爲蠶體に稀醋酸液の撒布に就て

三谷賢三郎 外3名 愛知蠶試報第3號 大正14年5月  
蠶品種は日1及び日106を用ひ、稀醋酸液の濃度と撒布の回数とにより(1)稀醋酸5%液毎日1回撒布區、(2)稀醋酸1%液毎日撒布區、(3)稀醋酸5%液各齡1回撒布區、(4)稀醋酸1%液各齡1回撒布區(5)對照甲蒸溜水毎日1回撒布區、(6)對照乙蒸溜水各齡1回撒布區(7)對照丙普通飼育區とせるに、繭絲織度は(6)區最も太く(5)區之に次ぎ、(2)區、(1)區最も細し。

(427) 白癩病豫防の爲蠶體に石灰粉末の撒布に就て

三谷賢三郎 外3名 愛知蠶試報第4號 大正15年9月  
日1他2品種を用ひ、石灰粉末毎日2回撒布區、石灰粉末毎日1回撒布區、對照區の3區別とし、春秋3期に互り行つた所、繭絲織度は飼育時期により一定ならずして石灰撒布區と對照の間に差異を認めず。

(428) 蠶産乾燥材料と繭絲質との關係試験

鹿兒島蠶試 鹿兒島蠶試報告第2號 昭和3年6月  
試験區は粗糖區、燒糖區、切葉區、干草區、木灰區、撒土區、無使用區、對照區(1齡—3齡粗糖使用、4齡—5齡切葉使用)に分く。乾燥材料は除沙の糖入又は多濕の際使用し、撒土區は毎給桑前行ふ。支7×歐7を用ふ。織度は切葉區最も太く、干草區之に次ぎ、木灰區、粗糖區最も細し。

(429) 硬化病蠶體消毒劑の撒布及び添食が蠶に及ぼす影響試験

味岡秀夫 外1名 鹿兒島蠶試報告第20號 昭和8年3月

支105×日110を用ひ、フォルマリン區(1%液)、ネオピローン區(稚蠶期1000倍壯蠶期500倍液)、クライト區(200倍液)、清水區、對照區の5區を作り、撒布及び添食共に眠中以外毎日行へり。

織度は對照區最も太く、フォルマリン區最も細きも各區間に大差なし。

(430のイ) 箱飼に於ける硬化病豫防に關する試験

長谷川和雄外2名 廣島蠶試彙報第7號 昭和9年4月  
春は歐16×支14、夏秋は支106×日110、支106×日7を用ひ、對照、フォルマリン0.1%、0.3%、0.5%、1.0%に分ちたるに、繭絲織度は概してフォルマリンの濃度高くなるに従ひて細くなり、1.0%區特に細し。

(430のロ) フォルマリン瓦斯接觸育に關する研究

貞包新 忠清南道原蠶彙報第4號 昭和9年5月  
(1) 稚蠶期に於ける原液フォルマリン瓦斯接觸育

に就て

秋期日7×支106を用ひ、無撒布區、250c.c.(對一立方尺)、500c.c.(同)、750c.c.(同)、1000c.c.(同)の5區別としたるに、繭絲織度は無撒布區最も太く、撒布區では撒布量多きに従ひ織度細し。

(2) フォルマリンと蠶の生理との關係

春は支14×歐17、秋は日7×支106を用ひ、水區、0.05%、0.1%、0.2%、0.3%、0.5%、1%としたるに、繭絲織度は春は0.1%區、對照區太く、0.05%區、0.3%區細し。秋は0.1%區最も太く、0.3%區之に次ぎ、0.2%區、0.05%區細し。

(431) 箱飼に於ける硬化病豫防上光線の效果に就て

高瀬軍治、濱中嘉之 和歌山蠶試報告第14號 昭和10年5月  
支106×分離白1號にてフォルマリン0.5%區、太陽照射筒縮區(筒縮を日光に照射せるものを箱蓋の内側につける)、赤外線照射區とす。繭絲織度はフォルマリン0.5%區細し。

(432) 箱飼に於ける硬化病豫防上ニンニクの效果に就て

濱中嘉之 和歌山蠶試報告第14號 昭和10年5月  
支106×分離白1號に付き對照區、ニンニク液區、ニンニク球根區、ニンニクエキス區、フォルマリン0.5%區、フォルマリン0.3%區としたるに、繭絲織度はフォルマリン0.3%區、ニンニクエキス5%區細く、ニンニク液區太く、一定の傾向を見ず。

(433) 箱飼に關する試験

富秀雄 外2名 長崎蠶試報第3號 昭和10年8月  
1, 箱飼に於けるフォルマリン瓦斯の影響に關する試験

春、初秋、晩秋と行ひ、春は歐16×支14號、初秋及び晩秋は日110號×支105號を用ひ、桑は改鼠及び魯桑を用ふ。試験區を對照區甲(1—2齡普通箱飼)、フォルマリン0.1%區(1—2齡0.1%フォルマリン液撒布)、フォルマリン0.3%區(1—2齡0.3%フォルマリン液撒布)、フォルマリン0.5%區(1—2齡0.5%フォルマリン液撒布)、フォルマリン1.0%區(1—2齡1%フォルマリン液撒布)の6區を設く。試験成績中織度に關しては各區間に大差なきも、フォルマリン0.3%區は織度太きものの如きも、フォルマリン1.0%區之に反す。

2, 箱飼に於けるセロファン紙の應用に關する試験

春、初秋、晩秋と行ひ、蠶品種、桑品種共に上記1の場合と同じなり。對照區(1—2齡普通箱飼と

し、以後普通育)と試験區(1-2齡セロファン紙應用箱育)とを設けて試験せり。その結果織度に関しては兩區間に差異なし。

3, 箱飼に於ける調桑形式に関する試験

春には蠶16號×支14號、初秋には支106號×日110號、晩秋には支106號×日7號を用ふ。試験區は無濕布と濕布とに大別し、更に各々を剝桑區、全葉區、剝芽區、全芽區、條桑區に分け總計10區とす。この場合1-2齡間箱飼となし、以後普通育とし全區同一に飼育す。試験成績中織度に関しては全區間に一定の傾向なし。

(434) フォルマリン瓦斯に依る硬化病豫防法に関する試験、蠶兒にフォルマリン瓦斯接觸の生理的影響

牛込正一、戸部正久 群馬縣蠶試報告第25號 昭和11年5月

1, 晩秋期日110×支106を以て稚蠶期をボール箱飼ひとし、フォルマリンの濃度により各區に分ち、箱内に於て瓦斯を發散せしむ。標準區、蒸溜水區、0.1%區、0.3%區、0.5%區、1.0%區、2.0%區の區を設く。織度に於て太きは1.0%區、最も細きは2.0%區、0.5%區にして他は中位に屬するも、其の差僅少にして一定傾向の差異を認め難し。

2, 晩秋期日111×支107を以て稚蠶期をトタン箱飼とし、標準區、水區、0.1%、0.3%、0.5%、1.0%區に分けて試験す。織度は0.1%及び0.3%の兩區は稍々太く、0.5%及び1.0%の兩區は細く、標準區及び水區は中位なるも其の差僅少なり。

飼育の(21)其他(C) 蠶關係雜(實驗例13)

(435) 蟹蛆の寄生が繭質に及ぼす影響

肥後俊彦 外2名 東京蠶講試験成績第45號 明治45年2月

一化性寄熟を用ひ、3,4,5齡に蛆卵を添食せしめたるものと、せざるもの繭絲織度を比すれば、第3齡添食區寄生のもの著しく細き外、蛆の寄生の有無に依り一定の傾向なし。

(436) 除沙時期試験

田中禰雄、大平金吉 長野縣松本原蠶事報告第2號 大正11年2月

夏蠶期に日本錦を用ひ、除沙時期により朝區、晝區、夕區としたるに繭絲織度は晝區最も太く、朝區、夕區の間には差異なし。

(437) 條桑給與の除沙回数に関する試験

西川砂 岐阜蠶試報第2號空大正13年3月

蠶品種は日1×支4及び支4×日1を用ひ、毎日糞拔

除沙區、毎日除沙區、隔日除沙區、2日除沙區の4區としたるに、繭絲織度は日1×支4では毎日除沙區最も太く、隔日除沙區最も細し。支4×日1では毎日糞拔除沙區最も太く、隔日除沙區最も細し。

(438) 炭火、煉炭、電熱比較研究

福島蠶試 福島蠶試報第1號 昭和2年3月

日1×支4にて試験せるに、電熱區は經過短く繭絲織度も太し。

(439) 電熱保温による飼育成績に經濟調査

東畑道夫 愛知蠶試報第5號 昭和3年12月

日1他3品種を用ひ、電熱區と木炭區とに分ちたるに、繭絲織度は概して電熱區の方太し。

(440のイ) 異りたる採種形式蠶種の比較試験

井上秀夫 蠶絲學報第10號の7 昭和3年7月

春期に日107、日110、支101、支102、支103、支101×支9の6品種を用ひ、何れも黒種區、生種區、鹽酸燻化種區、電氣燻化種區に分けて比較調査せる場合、織度に於ては生種最も太く他は大差なし。

(440のロ) 補温材料比較試験

松永實 石川蠶試報第4號 昭和5年3月

補温材料を埋薪、埋炭、塊炭、煉炭、木炭の5種とし、日1×支4を用ひ春蠶期比較せるに、繭絲織度は埋薪稍々細く、他は大差なし。

(441) 春蠶壯蠶期飼料として新梢の先端を摘蕊したる桑葉の蠶兒給與試験成績

佐瀬旭 廣島蠶試試験成績彙報第2號 昭和6年3月

- 第1區 摘蕊せざる桑葉を(4,5齡間給與。
- 第2區 四齡摘蕊桑5齡對照區に等し。
- 第3區 5齡摘蕊桑4齡對照區に等し。
- 第4區 4,5齡摘蕊桑給與。

蠶品種は障7を用ひたるに、繭絲織度は第4區最も太く、第3區之に次ぎ、第1區最も細し。

(442) 食桑時間制限試験

大分蠶試 大分蠶試成績報告第14號 昭和6年11月

標準、稚蠶A(30)、稚蠶B(60)、壯蠶A(60)、壯蠶B(90)、全齡A(稚蠶30壯蠶60)、全齡B(稚蠶60壯蠶90)の各區を設けた。但し括弧内の數字は食桑制限時間とす。繭絲織度は標準區、稚蠶A區及び全齡A區太く、全齡B區最も細し。

(443) 朝鮮に行はるる各樣蠶室の飼育效果に就て

中村鐵夫 朝鮮農試蠶絲部彙報第12號 昭和7年2月

蠶室としては溫突蠶室、土間蠶室、普通蠶室の3種とす。蠶品種は春は支7×楳7、支9、日1×支4、夏秋は日107を用ひたるに、繭絲織度は春期に於て飼育

では三者差異なく、上葉での温突蠶室のもの太し。夏期に於ける飼育では土間蠶室のもの太く、温突蠶室のもの細し。晩秋期飼育では三者間に差異なし。

#### (444) 飼育環境を異にせる繭の各形質間の相關關係に就て

小針喜三郎 蠶絲學報第496號 昭和8年6月

豊白×瑞祥を用ひ、九州、四國、近畿、中國、中部に於ける府縣の生産繭に付きて試験せり。繭絲織度と生繭重との間には確實に正の相關關係あり。全絲長との間には著しからざるも、尙明らかに正の相關關係あり。

#### (445) 壯蠶期飼育並に上葉場所に関する試験

瀬尾武文 鹿兒島蠶試報第22號 昭和10年3月

日7×支106を用ひ、3眠迄は蠶室階下にて同一に飼育し。4眠起蠶となりてよりこれを蠶室階下區、蠶室階上區、簡易蠶室(バラツク蠶室)、蠶室の庇區に分け、飼育並に上葉場所を異にして、これが蠶作並に繭絲質に及ぼす影響を調査せり。その結果より織度を見ると、蠶室階上區、同階下區比較的太く、簡易蠶室區最も細きが如し。

#### (446) 壯蠶體重並に繭重と繭絲織度との相關關係

池田次男 蠶絲學報第18號の2 昭和11年2月

初秋、晩秋2期に於て日111×支107、分離白1×支106を用ひて、壯蠶體重並に繭重と繭絲長、絲量及び繭織度との相關關係を調査した。その結果織度に関しては次の如し。

1. 3眠體重と織度との關係は、兩品種共正の關係明かなるが、その程度稍々微弱である。
2. 4眠體重と織度との關係は、兩品種共正の關係明かであるがその程度弱く、且つ3眠體重以下である。
3. 5齡盛蠶體重と織度との關係は、兩品種共正の關係確實に存在し、其程度最も強い。
4. 熟蠶體重と織度との關係は、正にして盛蠶體重に次いで強い。
5. 生繭重と織度との關係は、正にして熟蠶に次いで強い。
6. 繭の大きさと織度との關係は、正に在るがその程度最も弱く、繭長、繭幅共に蠶體重より遙かに低い。

#### 飼育の(22)其の他(II) 繭關係雜(實驗例11)

#### (447) 桑樹の樹齡と繭質との關係試験

東畑道夫 愛知蠶試報第3號 大正14年5月

供試蠶品種は廠7を用ひ試験區は、

第1區 栽植後3年目の赤市。

第2區 栽植後12年目の赤市。

第3區 稚蠶期には第1區、壯蠶期には第2區の桑葉給與。

第4區 稚蠶期には第2區、壯蠶期には第1區の桑葉給與。

繭絲織度は第2區最も太く、第4區之に重き、第1區最も細し。

#### (448) 早生桑の蠶兒飼料的價值に関する試験

近藤彦助 愛媛蠶試報第16號 大正15年11月

(1) 廠7號、日107號、日1號×支4號、日107號×支4號×支101號を用ひ、標準區として稚蠶期市平、壯蠶期魯桑を、早生桑區として市平を、中生桑區として魯桑を給與せり。繭絲織度を見るに原蠶種即ち種繭のものは標準區最も太く、早生桑區稍々細し。絲繭用において中生桑區最も太く、標準區最も細し。

#### (2) 次代蠶兒との關係

標準區、早生桑區、中生桑區給與の次代蠶を見るに繭絲織度は標準區最も太く、中生桑區最も細し。

#### (449) 荒廢桑園と蠶及絲質との關係試験

近藤彦助、清家重好 愛媛蠶試報第16號及第17號 大正15年11月及昭和3年1月

供試品種 春期日1號×支4號、秋期日107號×(支4號×支101號)。試験區を荒廢桑園區、中庸桑園區、優良桑園區の別とす。繭絲織度は春期にありては各區間に一定の傾向認め難し。秋期にありては中庸桑園區稍々太く、荒廢桑園區及び優良桑園區細し。而して後者兩區間には大差なし。

#### (450) 稚蠶用桑と蠶兒發育との關係試験

福島蠶試、福島蠶試報第2號 昭和4年3月

春 日1×支4を標準區、 $\frac{1}{2}$ 伐採區(春發芽前條數を整理し $\frac{1}{2}$ とす)、無肥料桑區、山桑區(山に自生せる桑)としたるに繭絲織度は大差なきも、概して標準區太く、無肥料區細き傾向あり。

秋 日107×支4、(支101×支4)×青熟を用ひ、標準區、 $\frac{1}{2}$ 伐採區、春刈區、無肥料區、山桑區、魯桑實生區等につき試験せるに、無肥料、山桑等は繭絲織度細き傾向あり、標準區太し。

#### (451) 夏秋蠶稚蠶用桑に関する試験成績(豫備試験)

愛知蠶試、愛知蠶試印刷物 昭和8年3月

施肥時期との關係

日107號×支101號。試験區を對照區、春多量區、夏多量區、秋多量區、春窒素區、夏窒素區の六區とす。

織度は各區大差なきも、標準區稍々太き傾向あり。

(452) 夏秋蠶稚蠶用桑に関する試験成績(豫備試験)

愛知蠶試、愛知蠶試印刷物 昭和8年3月

土質との關係

蠶品種、日107號×支101號。試験區は、濕地區、乾地區の二區とす。

繭絲織度は秋期及び晩秋期共に兩試験區に於ては大差なし。

(453) 夏秋蠶稚蠶用桑に関する試験成績(豫備試験)

愛知蠶試、愛知蠶試印刷物 昭和8年3月

栽植距離との關係

日107號×支101號を供試品種となし、試験區を6尺畦區、3尺畦區の2區とす。

繭絲織度の細太を見るに、各區間に於て大差なし。

(454) 夏秋蠶稚蠶用桑に関する試験成績(豫備試験)

愛知蠶試、愛知蠶試印刷物 昭和8年3月

貯藏發分との關係

日107號×支101號。試験區を發芽前伐截區(對照區)、發芽前冷藏區(植付2年目の桑樹を鉢に栽植し、發芽前C.10度に2日間、以後C.5度の場所に移し、秋蠶揃立25日前にC.10度の場所に3日間、C.15.5度の場所に3日間、C.18.4度の場所に3日間移し保護し、揃立3週前取出し、圃場に移し發芽せしめたるもの)、埋管區(發芽前枝條を伐截し、1株毎に砂を盛り、揃立20日前に砂を除き發芽せしめたるもの)、土管埋條區(發芽前桑樹1株毎に土管を嵌め、砂を填め蓋をなし、20日前に土管を除き發芽せしめたるもの)、桑葉冷藏區(春蠶期に收穫せる桑葉をC.1.6度の所に冷蔵し、秋蠶期使用せり)の5區とす。繭絲織度は發芽前伐截區稍々太く、其他の區には大差なし。

(455) 掃立用桑試験

山内直樹、前田隆信 鹿兒島蠶試報第21號 昭和9年3月

蠶品種は支106を用ひ、二眠迄赤市平を給與し、以後改良鼠返を給與す。試験區は托葉着生最下部のものを給與せるものを第1區とし、托葉着生最下部のものより上方へ2枚目のものを給與せるものを第2區とし、3枚目のものを給與せるものを第3區とし、以て掃立用桑として托葉の着生部位の如何が蠶兒の發育、繭質並に産卵に及ぼす影響を知らんとす。試験成績中織度に就て見るに、第1區最も太く、第3區最も細し。

(456) 桑葉の成長と托葉の脱落並に蠶兒發育との關係に就て

山内直樹、現玉園憲三 鹿兒島蠶試報第22號 昭和10年3月

1. 稚蠶期用桑の位置と蠶兒との關係

區別	1齡期	2齡期	3齡期	4,5齡期
第1區	托葉着生第3葉目	托葉着生2-1葉目	托葉無着生1-3葉目	托葉無着生5-15葉目
第2區	同上第2葉目	托葉着生1葉目及托葉無着生1葉目	托葉無着生2-4葉目	同
第3區	同上第1葉目	托葉無着生1-2葉目	托葉無着生3-5葉目	同

上記の如く3區を設け、支106×日110を用ひ、稚蠶期は改良鼠返區、富榮區、魯榮區に分け、壯蠶期は一樣に魯榮を用ひた。

織度は桑品種的關係はあるが、大體に於て秋葉區なる第1區最も太く、中葉なる第2區之に次ぎ、硬葉なる第3區最も細し。

2. 壯蠶期用桑の葉位と蠶兒との關係

支106×日110を用ひ、3齡までには一樣に飼育し、4,5齡期に於て第1區(托葉無着生第1-5葉目)、第2區(同上第6-10葉目)、第3區(同上第11-15葉目)、第4區(同上第16-20葉目)、第5區(同上第21-25葉目)に分ちたり。稚蠶期は一樣に大葉早生を用ひ、壯蠶期は改良鼠返區と魯榮區とに分けたり。織度は着生位置の中位にあるもの最も太くして、夫れを中心として上部の軟葉又は下部の硬葉を給與せるものは順次細し。

(457) 夏秋蠶條桑育に関する試験

富秀雄、中山朝合郎、山口留一 長崎蠶試報第4號 昭和11年8月

試験區は春刈摘梢中間伐採區、春刈中間伐採區、春刈殘芽伐採區、夏刈中間伐採區、夏刈中間殘芽交互伐採區、夏刈摘梢中間伐採區及び標準區に分く。桑品種は改良鼠返、蠶品種は日110×支105を用ひ。織度は標準區以外は各區間に一定の傾向なく、いづれも標準區よりは細し。

IV 上簇關係部門

上簇の(1)上簇溫度、氣流 (實驗例2)

繭絲織度は上簇溫度高きに従ひ細く、上簇溫度多きに従ひ太く、尙氣流に關しては殆ど影響なきも、少しく氣流のある場合に太き傾向を認む。

(458) 上簇試験

横田長太郎、武政吉 東京蠶事報告第21號 明治

37年3月

青熟品種を以て炭中を高温區、低温區、乾燥區、湿润區、冷潤區の5區に分けて試験せるに、織度に於ては冷濕區最も太く、湿润區、低温區之に次ぎ、高温區最も細し。

(459) 上簇試験

荒木武雄、荒木柳司 京都蠶事報告第8號 明治38年3月

1. 小石丸を以て上簇中を標準區、高温區、低温區、温度劇變區に分けて保護したるに、織度は低温區最も太く、標準區之に次ぎ、温度劇變區及び高温區細し。
2. 小石丸を以て上簇中を標準區、乾燥區、湿润區に分けて保護したるに、織度は標準區最も太く、乾燥區最も細し。

(460) 上簇室の換氣

東京蠶業講習所 東蠶講習所臨時報告蠶事要報 (甲) 明治39年6月

上簇室の開放如何によりて全開區、半開區、全閉區に分けて試験せるに、織度に於ては半開區最も太く、全開區最も細し。されど各區の差大ならず。

(461) 上簇室の濕湿度

東京蠶業講習所 東蠶講習所臨時報告蠶事要報 (甲) 明治39年6月

試験區を高温區(83.9°F、66.3%)、低温區(68.9°F、85.2%)、乾燥區(75.3°F、65.8%)、湿润區(73.6°F、94.4%)とに分けたる場合に、織度に於ては湿润區最も太く、低温區之に次ぎ、高温區最も細し。

(462) 夏蠶繭繭中保護試験成績

高橋清七、二宮九二二 上田蠶事同窓會報(6) 大正9年4月

二化性新屋生種を用ひ、標準區、濕濕區、高温區、乾燥區、低温過濕區としたるに、繭絲織度は低温區、標準區太く、過濕區最も細く、高温區、乾燥區之に次ぐ。

(463) 上簇温度が繭層量に及ぼす影響に就て

田井保次 那是試験成績 大正13年 上簇温度を90°F、80°F、70°F、天然放任となす。春蠶期

支7×歐7を用ひたるに、繭絲織度は上簇温度低きもの程太し。

(464) 上簇後の温度並に湿度に関する試験(第1報)

牛込正一、服部文雄 群馬蠶報第5號 昭和3年6月 蠶絲學報第10卷第5、6號 昭和3年5、6月 第1試験(8月5日上簇)

湿度を60%、70%、80%、90%とし、温度を70°Fとす。蠶品種日110×支102、繭絲織度は90%區最も太く、60%區及び80%區細し。

第2試験(8月17日上簇)

湿度を第1試験同様とし、温度を78°Fとす。蠶品種も前同様。繭絲織度は90%區最も太く、60%區最も細し。

第3試験(11月8日上簇)

湿度を第1試験同様4種とし、温度を86°Fとす。蠶品種も同前。繭絲織度は60%區最も太く、90%區最も細し。

第4試験(10月5日上簇)

湿度を70%とし、温度を68°F、73°F、78°F、83°Fの4區とす。蠶品種は同前。繭絲織度は概して低温區程太し。

第5試験(8月17日上簇)

試験區

	上簇より吐絲中頃迄	吐絲中頃より終了まで	吐絲終了以後
5區	60%	90%	60%
6區	90	60	90
7區	60	60	90
8區	90	90	60
9區	60	65' 90	60
10區	65' 90	60	65' 90
11區	60	60	65' 90
12區	65' 90	65' 90	60

蠶品種は第1試験同様。繭絲織度は第8區最も太く、第12區及び第6區之に次ぎ、第3區最も細し。以上5試験區より得たる結果を概括すれば、繭絲織度は差異少なきも、温度は低き程、湿度は高き程太き傾向あり。

(465) 上簇中の濕湿度と繭絲質との關係試験

鹿兒島縣蠶業試験場 鹿兒島縣蠶試報告第2號 昭和3年6月

試験區は第1區(炭中温度80°F、湿度60%中に5日間保護)、第2區(80°F、60%中に2日間、75°F、70%中に2日間、70°F、80%中に1日間保護)、第3區(75°F、70%中に5日間保護)、第4區(70°F、80%中に5日間保護し、蒞拔を行はざるもの)の4區に分つ。供試蠶品種は日1×支4なり。織度は第1區最も太く2.92デニール、第3區之に次ぎ2.90、第4區は2.85なり。第2區最も細く2.78なり。

(466) 上簇後の温度並に湿度に関する試験(第3報)

牛込正一、服部文雄 群馬蠶報第6號 昭和4年3月



## 第1試験

供試蠶品種 日110×支102

試験區 振拔區、不振拔區

振拔區と不振拔區の關係濕度<sup>%</sup>の差次の如し。

9月5日 (上炭翌日)	2.5—12.0
9月6日	1.0—7.5
9月7日	2.0—6.0
9月8日	1.0—5.0
9月9日	0—6.0
9月10日	0—4.0

(濕度は勿論不振拔區多し)

繭絲織度は不振拔區太し。

第2試験も繭絲織度は不振拔區太し。

## (467) 上蔭後の換氣に関する試験

牛込正一、服部文雄 群馬蠶報第5號 昭和4年3月

## 第1試験

換氣回数により3回區、10回區、17回區、24回區とす。溫度は各區共75°F、濕度は70%。供試蠶品種は日110×支102。

10月31日上蔭。

繭絲織度は10回區最も太く、17回區、24回區之に次ぎ、3回區最も細し。

## 第2試験

換氣回数は前と同一にし、溫濕度は各區共83°F、80%とす。蠶品種は日110×支102にして、10月6日上蔭。

繭絲織度は3回區最も太く、24回區之に次ぎ、10回區最も細し。

## (468) 上蔭後の溫度竝に濕度に關する試験(第2報)

牛込正一、服部文雄 群馬蠶報第6號 昭和4年3月

供試蠶品種は日110×支102とす。

## 第1試験

試験區を68°F、97%、73°F、82%、78°F、70%、83°F、60%とす。繭絲織度は68°F、97%最も太く、78°F、70%及び83°F、60%の兩區細し。

## 第3試験

試験區は第1試験と同様なり。繭絲織度は68°F、90%區最も太く、83°F、60%區最も細し。

## (469) 秋蠶上蔭に關する試験

京都府蠶試 京都府蠶試報告第3號 昭和5年2月  
昭白×日110を用ひたり。

## (1) 上蔭後の溫濕度と繭質

繭絲織度は低温乾燥區最も太く、低温多濕、對照

之に次ぎ、高温多濕區最も細く、高温乾燥區之に次ぐ。

## (2) 換氣の程度と繭質

換氣の有無と繭絲織度とは關係なし。

## (3) 熟蠶の熟度と繭質

繭絲織度は概して熟度進むに従ひ細き傾向あり。

## (4) 炭器の種類と繭質

紙製炭、木村製炭、折葉炭、器械炭、細炭、麩炭の間に繭絲織度の差異なし。

## (5) 建拔の回数と繭質

繭絲織度は二回建拔區の方が一回區より太き傾向あり。

## (470) 上蔭法試験

廣島蠶試庄原支場 廣島蠶試庄原支場彙報 昭和6年3月

伊白×支5、支105×支101を用ひ、各區溫度を24°Cとし、濕度を90%、80%、75%、70%となし、各區を更に振拔15時間、同20時間、同30時間、振拔を行はざる區に分ちたるに、繭絲織度は乾燥區稍々細きが如く、又振拔時期の早晚竝に全く行はざる區との間には一定の傾向を認めず。

## (471) 上蔭室の環境と繭解除との關係試験

大須賀友衛 他3名 愛知縣蠶試試験報告第3號 昭和6年3月

日107×支101を供試し、補溫開放、補溫密閉、補溫多濕開放、補溫多濕密閉、開放、密閉、多濕開放、多濕密閉、室外等の區を設けたるが、繭絲織度は試験の回数毎に異りて一定の傾向を認めず。

## (472) 上蔭保護中の氣流の有無竝に溫濕度の高低の繭質、絲質に及ぼす關係試験

静岡蠶試 静岡蠶績第19號 昭和6年3月

有氣流と無氣流とを乾燥、濕潤及び高温と組合せ初秋蠶及び晩秋蠶に試験せり。蠶品種は日107×浙江。概して濕潤區は乾燥區より、高温區は然らざるものより繭絲織度太き傾向あり。氣流と繭絲織度との間には一定の關係なし。

## (473) 蔭中溫濕度が繭質竝に絲質に及ぼす影響

田村熊次郎、松村季美、金崎俊英 長野蠶試報告第18號 昭和6年5月

溫度に關しては支103×日110、正白×新白等5品種を供用して試験せるに、繭絲織度は上蔭溫度の昇るに伴ひ細くなる。

濕度に關しては略々同様な蠶品種を用ひたるが、濕度の多少により繭絲織度に大差がない。

上蔭中4時間毎に50%—72%、50%—94%、72%

—94%に温度を變化せしむるに、變化せしめざるものに比し繭絲織度は50%—72%に變化せる區は稍々細く、50%—94%に變化せる區は太く、72%—94%に變化せる區は差なし。故に變化により差なしと認めらる。

低温多湿、高温乾燥、中間温度の3區間の繭絲織度は一定の傾向なし。

吐絲終了前後の温度は繭絲織度に一定の傾向ある關係を認められず。

温度の繭絲織度に及ぼす影響の蠶品種的の差異には一定の傾向なし。

温度の繭絲織度に及ぼす影響の雌雄別の差異には一定の傾向なし。

#### (474) 上簇中に於ける最適温度の再吟味

菅野芳衛 中央蠶絲報第178號 昭和6年5月

桑白×那是白、大白龍×那是白を用ひ、飼育温度を70°F、77°F、85°Fとし、上簇温度を70°F、75°F、80°F、85°Fとす。繭絲織度は飼育温度と關係なく、上簇温度の低くなるに従ひ細小となる。

#### (475) 上簇試験

徳島縣蠶業試験場 徳島縣蠶試報告第6號 昭和6年11月

歐9×金黃、日110×支103、支101×目1を用ひ、アドソール乾燥區、扇風器區、屋外區、對照區を設けたるに、繭絲織度は春は扇風器區細く、秋は對照區太く、アドソール區細く、晩秋は扇風器區太し。即ち一定の傾向なし。

#### (476) 營繭温度と繭質との關係試験

小松茂久、山口一雄 神奈川蠶試報第2號 昭和7年3月

第1日高温區、第2日高温區、第3日高温區、3日間高温區、標準區の5區とし、歐17×支14を用ひたり。繭絲織度は太きは標準區及び第2日高温區等にして、3日間高温區最も細し。

#### (477) 春蠶支區1交代雜種の上簇に就ての試験

地引嘉作 他2名 熊本蠶試彙報第4號 昭和8年4月

純金黃×純優白を用ひ、標準、高温乾燥、低温多湿にて飼育せる繭の標準型、ボカ繭型、深縷俵型、破風尖型、破風薄型を比較したるに、繭絲織度は標準型の低温多湿區は他區より太きも、他の型では區區にして細太の關係一定ならず。

#### (478) 營繭中の温度と繭絲織度に就て(豫報)

特に織度偏差に就て

吉田要 蠶絲界報XXXIV No. 516 昭和10年2月  
衣笠彙報第346號 昭和10年6月

春蠶期、晩秋蠶期二期に行ひ、蠶品種は春期はアスコリー×支16號を、晩秋期は日7號×支106號を用ひたり。春期は營繭中温度を68°F區、75°F區、80°F區、前半68°F後半80°F區、前半80°F後半68°F區の5區に分ち、晩秋期は73°F區、75°F區、77°F區、前半73°F後半75°F區、前半75°F後半73°F區、前半73°F後半77°F區、前半77°F後半75°F區の7區に分ち。但し前記前半後半の温度を變化せしめたる境界は、各區共絲長檢尺器500回日の吐絲をなせる時刻に於てせり。調査成績中織度に關しては次の如し。

春蠶期に於ては68°F區稍々太く、80°F區、75°F區と大差なく、中途變温せるものは然らざるものに比して細き傾向を示す。

晩秋期にては73°F、75°F、77°Fと上昇する程稍々太くなり、變温せるものは一定の傾向なし。

其他抄録番號 (114) (499) (524) 参照。

#### 上簇の(2)上簇方法 (實驗例23)

繭絲織度は自然上簇と普通上簇との間に殆ど差異なく、又建抜の有無、早晚回数に於ても同様差異を認めず。

#### (479) 上簇に關する試験

福島縣蠶業試験場 福島縣蠶試報告第3號 昭和6年4月

1. 建抜に關する試験、支4、目1を用ひたるが、建抜の早晚により繭絲織度に細太ある一定の傾向を認めず。
2. 簇の種類に關する試験、福島歐白×支4、青熟×支102を用ひたるが、簇の種類により繭絲織度に一定の傾向なし。

#### (480) 上簇に關する試験

河田和一郎、松尾重晴 京都府蠶試彙報第1號 昭和7年2月

蠶品種は日110×歐17を用ひ、普通區、建無區、上段區、中段區、下段區に分ちたるに、繭絲織度は普通區と建無區との間には差異なく、上段に比し下段太き傾向あり。

#### (481) 條桑育の上簇法に關する試験

牛込正一 群馬縣蠶試彙報第5報 昭和7年5月

1. 供試蠶品種は春は支13×歐16、秋、晩秋は日110×支105なり。壯蠶期條桑育を以てし、上簇法を1頭拾ひ上簇、一齊上簇、自然上簇の3區とせる場合に、織度は春、秋、晩秋を通じ自然上簇法最も太く、一齊上簇法最も細し。而して自然上簇法と1頭拾ひ上簇とは殆ど差異なきが如し。

2. 上熟蠶品種を以て、改良簇、百足簇を以て自然上簇を行ひし場合に、織度は春は百足簇の方太きも、秋、晩秋は改良簇の方太し、されど夫等の差僅少なり。

#### (482) 上簇装置に関する試験

京都府蠶試 京都府蠶試彙報第2號 昭和8年2月  
蠶品種は春 支14×歐17、秋 日110×支104を用ひ、對照區、二段式建無上簇、簇臺式上簇としたるに、繭絲織度は春秋共に對照區最も太く、簇臺式上簇區最も細し。

#### (483) 自然上簇に関する試験

福島縣蠶業試験場 福島蠶試報告第4號 昭和8年3月

支14×歐17、日110×支105を供用し、普通上簇、大石式簇1枚、大石式簇2重、大石式簇3重、大形百足簇、小形百足簇、金網挿葉簇、金網挿葉束葉、蠶箔葉繩巻の各區につき試験せるに、繭絲織度は大差なし。

#### (484) 上簇改良試験

岩手蠶試 岩手蠶試彙報第5號 昭和8年4月  
歐16×支14、日110×支105を用ひ、對照、張抜1回、張抜2回 煉炭張抜1回、煉炭張抜2回 簡易上簇、空間上簇、夜間扇風機、晝間扇風機の9區としたるに、繭絲織度は一定の傾向なし。

#### (485) 蠶兒上簇に関する2,3の調査

吉田要 廣島蠶試彙報第5號 昭和8年4月  
歐16×支14外2品種を用ひ、逆上簇、段抜上簇、2回苞抜、普通區に分ち、春、秋、晩秋に上簇せるに、繭絲織度は逆上簇區最も太く、普通區之に次ぐ。

#### (486) 條桑育又は平飼蠶兒の簡便なる上簇方法に関する試験

清水雄太郎 滋賀縣蠶試彙報第1號 昭和9年1月  
蠶品種は歐16×支14(春)、日110×支105(夏、秋)を用ひ、拾ひ取上簇區、簇固め使用(金山簇)、竹簇區、折葉簇區と4別したるに、繭絲織度は概して簇固め使用區最も太く、拾ひ取上簇區最も細き傾向あり。

#### (487) 上簇方法に関する試験

北澤周一 岐阜蠶試報第11號 昭和9年3月  
支14×歐16を用ひ、對照區(I頭拾)、建覆區(自然上簇應用逆上簇)、葦覆區(自然上簇應用普通上簇)の3區に分ちたるに、繭絲織度は三者の間に大差なきも葦覆區稍々細し。

#### (488) 條桑育又は平飼蠶兒の簡便なる上簇方法に関する試験

南谷太郎吉、武博道 鹿兒島縣蠶業試験場報告第

2號 昭和9年3月

對照區としてI頭拾ひとし、蠶箔上に昔川建を敷き其上に簇を乗せ、簇上には葦を疎に散布して蠶架に挿入す。建覆區として給桑後蠶座上に簇を乗せ、簇上に昔川建を覆ひ、熟蠶を一定數這ひ上りたる後之を簇箔に移し蠶架に挿入す。

葦覆區としては昔川建の代りに葦を疎に散布したるなり。供試蠶品種は春は支14×歐17、秋は支106×日110を用ひ。織度は對照區最も細く、建覆區或は葦覆區が太し。

#### (489) 平飼育の簡易上簇法に関する試験

岡崎信 他2名 愛媛縣蠶試報告第22號 昭和9年12月

##### 1. 自然上簇及び網取、拾ひ取上簇法との關係

歐16號×支14號、日110號×支105號、自然上簇A區(改良簇に簇固定器を裝置す)、自然上簇B區(簇固定器を裝置せず)、網取上簇區、拾ひ取上簇區(標準區)の4區を設け試験す。繭絲織度は春蠶にありては網取上簇區及び拾ひ取上簇區太く、自然上簇區に於て稍々細し。秋蠶及び晩秋蠶にありては各區共大差なし。

##### 2. 上簇時、葦覆及び建覆との關係

歐16號×支14號、日110號×支106號。試験區として葦覆區(簇上に切葉を覆ひ自然上簇をなす)、建覆區(簇上に建を覆ひ自然上簇をなす)、標準區(拾ひ取に依り上簇す)を設けたり。繭絲織度を見るに各區間に於て細太に一定の傾向を認め難し。

#### (490) 自然上簇に関する試験

原田長太郎、留奥きえ 鹿兒島蠶試大島支場報告第2號 昭和10年3月

試験區はI頭拾ひとし、蠶箔上に昔川建を敷き其上に簇を乗せ、簇上には葦を疎に散布せるものを對照區とし、蠶座上に簇を乗せ、簇上に昔川建を覆ひたるものを建覆區とし、昔川建の代りに葦を疎に散布せるものを葦覆區とす。供試品種は春は歐17×支14、秋は日110×支105を用ひ。織度は各區間の差殆どなく一定の傾向なし。

#### (491) 自然上簇法に就て

尾崎貞徳、山岡孝 兵庫蠶試彙報2號 昭和10年4月

##### (a) 熟蠶の登簇誘導方法に関する試験

蠶品種は支16×歐16(春)、日7×支106(秋)を用ひ、催熟より終熟まで春蠶期は28°C、25°C、22°C、晩秋蠶期には25°C、22°C、19°Cとし、上簇後は23°Cにて保護した。明暗は催熟より終熟までの期間

を燈照射の有無に依つて分つた。繭絲織度は春蠶期にては22°C區最太く、28°C區最も細し。明暗と細太との關係は一定ならず。

(b) 炭の被覆物に関する試験

蠶品種は支10×畝10(春)、日7×支106(秋)を用ひ被覆物を藁、菅川藁、新聞紙としたるに、繭絲織度は春蠶期にては菅川藁區、藁區太く、新聞紙區最も細し。初秋にては無被覆區最も太く、他は大體相等し。

(c) 上蔭時の熟蠶数に関する試験

1蠶箱に600頭收容の場合

- (イ) 熟蠶300頭
- (ロ) 熟蠶450頭、未熟蠶150頭
- (ハ) 熟蠶300頭、未熟蠶300頭
- (ニ) 熟蠶150頭、未熟蠶450頭

1蠶箱熟蠶200頭、未熟蠶100頭

供試蠶品種は(2)に等し。繭絲織度は一定の傾向を認め難し。

(d) 蠶兒發育經過の齊否に関する試験

5齡飼食を次の三つに分けた。普通飼食區、早期飼食區、晚期飼食區の3區に分ちたるに、繭絲織度は晚期飼食區最も太く、他は細し。(日7×支106、初秋飼育)

(e) 自然上蔭法と普通上蔭法との比較試験

支14×畝10を用ひたるに、繭絲織度は春秋共に自然上蔭區太し。

(492) 自然上蔭法試験

富秀雄、中山朝倉郎、山口留一 長崎蠶報第3號 昭和10年8月

春は畝16號×支14號、初秋及び晩秋は日110號×支105號を用ふ。試験區は對照區として熟蠶1頭拾ひとし、蔭上に藁を粗に撒布す。建覆區として自然上蔭をなし、蔭上には菅川藁を覆ふ。藁覆區として自然上蔭をなし、蔭上に藁を粗に撒布す。對1箱上蔭蠶數を250頭とす。以上の下に試験せる結果中、織度に關しては各區間に一定の傾向なし。

(493) 自然上蔭法に関する試験成績

岩間茂平、望月芳雄、藤澤秀雄、乾安衛 山梨縣蠶業試験場彙報第7號 昭和11年3月

上蔭時にクレゾール石鹼液を粗糠に浸して蠶座に撒布し、熟蠶の這ひ上りを容易ならしめる目的を以て種々試験す。試験區をクレゾール石鹼100倍區、同200倍區、同400倍區、同800倍區、對照水區、クライト200倍區、無處理區に分け、春は畝18×支16、初秋は日111×支107、晩秋は日7×支106を用ひた

り。試験成績中織度に就て見るに、各區間の差異僅にして、一定の傾向を認め難し。

(494) 自然上蔭法に関する試験(特にクレゾール石鹼液の使用に就て)

富秀雄、山口留一 長崎縣蠶業試験場報告第4號 昭和11年8月

試験區をクレゾール石鹼100倍區、同200倍區、同400倍區、同800倍區、撒水區、標準區に分く。所定濃度のクレゾール石鹼液を粗糠に浸潤せしめたるものを蠶座に撒布し、其の上に給桑し蔭に乗す。蠶品種は日7×支106を、蔭は改良春日蔭なり。織度は100倍區稍々細き傾向あるものの如くなるも、他區間には一定の傾向認め難し。

其他抄録番號(175)(176)(469)(470)(499)(511)(512) 參照

上蔭の(3)上蔭熱度(實驗例8)

熱度の進むに従ひ、即ち上蔭前給桑回数多きに従ひ繭絲織度太し。

(495) 上蔭期の早晚と繭質との關係試験

肥後俊彦 他2名 東京蠶講試験成績第43號 明治44年4月

第一化新屋、小石丸、第二化新屋を用ひ、給桑回数により第一化新屋は15回、20回、25回(標準)、過熟に、小石丸は14回、19回、24回、29回、33回(標準)、過熟に、第二化新屋は12回、17回、22回、27回、32回(標準)、過熟の各區に分ちたるに、繭絲織度は食桑回数増加するに従ひ織度太く、過熟區最も太し。

(496) 上蔭に関する試験

徳島縣蠶業試験場 徳島縣蠶試報告第5號 昭和4年3月

支7×畝7を用ひたり。繭絲織度は、

1. 上蔭時期、適熟蠶最も太く、過熟蠶細し。
2. 同功菌防止劑として健蠶劑、病玉止劑、馬印玉止劑、酸性白土玉止劑、ウドン粉、ライトを用ひたるが、繭絲織度には大差なし。

(標準區とウドン粉區は少し太いか)

(497) 絹絲腺と早期上蔭並に早期より熱期に到る上蔭蠶の繭層に就きて

井上柳梧、北澤孝一 日本蠶絲學雜誌第2巻第1號 昭和6年2月

日1×支4を使用し、給桑回数を10回より熟蠶に至るまで34回まで25區に分ちたるに、繭絲織度は給桑回数を増加するに従ひ次第に太くなり、34回區最も

太し。

#### (498) 上簇時期並に簇中の保護取扱と繭解舒との關係試験

萩原孫三 他3名 愛知縣蠶試試驗報告第3號 昭和6年3月

國富×浙江、日1×支4、歐7×支7、華白×和自等を用ひて試験す。

1. 5齡給桑回数少き所謂綠蠶上簇は繭絲織度細し。但し1, 2回の給桑不足では差なし。
2. 簇の乾濕により繭絲織度に差なし。
3. 上簇蠶数の多少により繭絲織度に差なし。
4. 達秋時期の早晚により繭絲織度に差なし。
5. 收繭時期の早晚により繭絲織度に差なし。

#### (499) 上簇法に關する試験

金崎眞英、北島正生、竹内衛佐雄 長野蠶試報告第19號 昭和6年5月

熟度に關しては極端なる未熟蠶、未熟蠶、適熟蠶、過熟蠶と4區別したるに、繭絲織度は過熟蠶太く、極端なる未熟蠶細し。

上簇頭數に關して尺坪60頭、50頭、40頭の3區としたるに、繭絲織度は各區差異を認め難し。

上簇型式に關しては逆上簇と普通上簇の2區となしたるに、繭絲織度は逆上簇區稍々太き傾向あり。

簇器の種類に關しては折葉簇、今收簇、藤簇、寺田簇及び金山簇の5種とし、繭絲織度は折葉、金山簇稍々太き傾向あり。

簇器上被覆物に關しては藁、筵、繩網、絲繩の4區別したるに、繭絲織度は一定の關係を認め難し。

簇中濕湿度に關しては外氣低溫多濕の場合は春第1回及び晩秋第2回試験(24.4°C、22.8°C、21.1°C、無火力、屋内の6區)、春第3回試験(24.4°C、22.8°C、無火力區)、春第5回試験(18.3°C、90%、22.2°C、70.8%、26.7°C、50.1%)、晩秋第4回試験(23.8°C、20.0°C)に於て繭絲織度は概して低溫なるに従ひ稍々細き傾向あり。外氣高溫多濕の時は夏第1回試験(26.7°C、無火力、屋外)につきて見るに、繭絲織度は屋外區最も太く、26.7°C區最も細し。

蠶室開放程度に關しては全開、半開、密閉の3區別としたるに、繭絲織度は春秋兩期にありては密閉區太く、晩秋蠶期は之に反す。

扇風機使用に關しては使用の有無2區を設けたるに、繭絲織度の關係明らかならず。

上簇蠶箱收容數量につきては充満區、 $\frac{1}{2}$ 收容區、 $\frac{1}{4}$ 收容區の3區としたるに、繭絲織度は $\frac{1}{4}$ 收容區稍々太く、他2區は差異なし。

撒扱の有無に關しては之の有無と繭絲織度との關係一定ならず。

乾燥材料撒布に關してはアドソール、酸性白土、對照の3區としたるに、繭絲織度はアドソール使用區稍々細し。

上簇時に於ける硬化病預防劑撒布に關しては對照、水、フォルマリン(1%、2%)、氷醋酸(5%、10%)、クライト(200倍、100倍)、硬化防止劑、石灰の10區としたるに、繭絲織度は石灰撒布區稍々太く、氷醋酸10%液撒布區稍々細し。

#### (500) 綠蠶上簇に就て

古屋永昌 蠶絲學報第17卷第3號 昭和10年3月  
歐18×支100を用ひ、5齡食桑日數を3日、4日、5日、6日、7日、8日(熟蠶)としたるに、繭絲織度は食桑日數多きに従ひ太くなり、熟蠶となると7日數より稍々細し。

其他抄録番號 (119) (16) (469) 参照。

#### 上簇の(4) 簇器の種類 (實驗例15)

繭絲織度は簇の種類により多少の差異は有るものの如くなるも、各簇に就きての實驗例証しき爲確然たる傾向を認め得ず。

#### (501) 上簇器試験

横田長太郎、馬場由 東京蠶事報告第21號 明治37年3月

試験區を折葉甲區、同乙區(簇に銅線を入れ支柱となし横臥を防ぐ)、同丙區(簇に3角形の環を乗せて横臥を防ぐ)、蜈蚣簇區、簾簇區に分け、寄熟品種を以て試験す。織度に於ては折葉區はいづれも大きく、折葉丙區最も太し。而して簾簇區最も細し。

#### (502) 簇種類比較試験

牛込正一、服部文雄 群馬蠶試報第5號 昭和3年6月

#### 第1回試験(春蠶)

供試簇を近藤式、宮内式、萬年、林田、和合式、岸、寺田式、増田式、ダイヤモンド式、寺井式、壺、西村萬年、日之出、金線、一枚紙、松本式紙、島田、百足の18簇とし、日1×支4を用ひたるに、繭絲織度は近藤式簇、一枚紙簇、壺簇、和合式簇の順に太く、萬年簇最も細し。

#### 第2回試験(春期)

日1×支4を用ひ、近藤式、和合式、林田式、寺田式、島田の5種の簇を用ひたるに、繭絲織度は各簇間の差異少し。

## 第3 試驗(秋期)

日110×支108を用ひ、第2 試驗と同一炭を用ひたるに、繭絲織度は近藤式炭最も太く、和合式炭之に次ぎ、林田式炭最も細し。

## (503) 簇器比較試驗

静岡縣蠶業試驗場 静岡蠶績第19號 昭和6年3月  
紙炭(1) (新聞紙を覆ひ箱にて押へたるもの)、紙炭(2) (網を覆ひたるもの)、寺田炭、島田炭の4區とし、國富×浙江を用ひたるに、織度は紙炭(1)最も太く、島田炭最も細し。

## (504) 上炭と類節との關係研究

日高末吉、山本勇太郎 全羅北道原蠶試驗報告第1報 昭和6年4月

支4×日1、支那特大20號×赤熟、日107×支101、日107×(支9×支101)、日106×支101等の蠶品種につき試験せり。炭には改良炭、折炭、蜈蚣炭、生松葉炭、紙炭、生坐葉炭、安全炭を使用す。その中繭絲織度に關しては一定の傾向を認めず。

## (505) 上簇器と繭質との關係試驗

味岡秀夫、福満直二、羽生貞秋、堀之内綱雄 鹿兒島縣蠶業試驗報告第4號 昭和6年8月

炭の種類としては池田式炭、松本式炭、越勸式紙炭、蜂巢炭、林田萬年炭、日之出炭、改良寺田式炭、宮内式炭、百足炭、島田炭、若井式炭、増田炭、近藤式炭、春日式炭、有川炭、橋口炭の16種を用ひ、蠶品種は春は日1×支4、秋は日1×支101、支101×日1を飼育す。織度は年により又飼育時期により差異あり、一定の傾向認め難し。

## (506) 簇器及び上簇裝置改良試驗

栃木蠶試那須支場 栃木蠶試那須支場事報 昭和7年4月

安田炭、松本炭、吉澤炭、歐洲炭、林田炭、清水炭、改良炭、宮内炭、竹炭を用ひ、蠶品種は春支4×日1、秋日110×支105とした。繭絲織度は春は清水炭最も太く、安田炭最も細し。初秋は竹炭(六ツ山)最も太く、安田炭最も細し。晩秋は清水炭最も太く、吉澤炭最も細し。

## (507) 條桑育又は平飼蠶兒の簡便なる上簇法に關する試驗

栃木蠶試那須支場 栃木蠶試那須支場事報 昭和7年4月

標準、改良炭、竹枝、茶種殻、萩枝の5區とし、蠶品種は春は支4×日1、初秋は日101×支105、晩秋は支105×日110を用ひた。繭絲織度は春は改良炭區最も太く、標準區最も細し。初秋は標準區最も太

く、茶種殻區最も細し。晩秋は竹枝區最も太く、萩枝區最も細し。

## (508) 炭の構造に關する研究

水野保、高野平、飯村重男、熊谷勇一 茨城蠶報第4號 昭和8年3月

炭の山の高さと距離とを組合せて高×標、標×標、低×標、高×長、高×短、低×長、低×短、標×長、標×短の9區とせり。蠶品種は日110×支105を用ひた。繭絲織度は秋蠶期には炭上に切葉を掛けたものにては高×短及び低×長兩區稍々細く、掛けざるものにては低×短區最も太く、低×長區最も細し。晩秋蠶期には葉を掛けたものにては長×標、標×長、標×標區太く、低×短區最も細く、掛けざるものにては低×長區最も太し。

## (509) 簇器の構造に關する試験

小松茂久、瀧谷綠、山口一雄 神奈川蠶試報第3號 昭和8年6月

炭の山数を18、20、27に大別し、その各々を炭の高さを6種、10種、15種とす。蠶品種は春は支14×歐17、秋は相模×支105を用ひた。

同一高さに於ける山数の多少と繭絲織度との關係は一定ならず。

同一山数に於ける高さと繭絲織度との關係は一定ならず。

炭上に網を掛けた場合と然らざる場合とは、繭絲織度に一定の關係なし。

## (510) 簇器に關する試験

富秀雄 長崎縣蠶業試驗場報告第2號 昭和8年12月

簇器の種類について繭の性狀を比較調査す。供試蠶品種は歐16×支13、日110×支105、支14×歐16を用ひ、簇器の種類は島田炭、百足炭、中尾式炭、藤炭、春日炭、日の本炭なり。織度を見るに大差なし。

## (511) 簇器に關する試験

味岡秀夫、羽生貞秋、堀之内綱雄 鹿兒島縣蠶業試驗場報告第20號 昭和8年3月

## 1. 簇器の構造と繭質との關係

蠶品種は春は支14×歐16、晩秋は支105×日110を用ひ、炭は山形炭なる春日式炭を用ふ。試験區は6×3區(山の高さ6cm、山の間隔3cmとす。以下做之)6×4.5區、6×6區、6×7.5區、7.5×3區、7.5×4.5區、7.5×6區、7.5×7.5區、9×3區、9×4.5區、9×6區、9×7.5區の12區を設く。織度は7.5×7.5區最も太く、7.5×3區、9×6區之に次ぎ、6×6區最

も細し。他は大差なし。

2. 上蔭室の明暗と繭質との關係試験

供試蠶品種は春は支14×楸17、晩秋は日110×支105を用ひ、營繭開始より次の6區を設けて試験す。A區(終了迄暗室保護)、B區(薄皮繭迄暗室、終了迄明室保護)、C區(薄皮迄明室、終了迄暗室保護)、D區(終了迄明室保護)、E區(終了迄日中明室、夜間暗室保護)、F區(終了迄日中暗室、夜間明室保護)となしたり。因に夜間明は10燭光の明硝子タングステン電球を點燈せり。織度は春はA區最も太く、C區、E區、D區の順に細く、B區最も細く、晩秋にはF區最も太く、E區、A區、B區の順に細く、D區最も細し。従つて一般的に見れば各區間には一定の傾向なきが如し。

(512) 上蔭法試験

患清南道原蠶種製造所 患清南道原蠶種製造所發報第3號 昭和9年3月

日1×支4(春蠶期)、支9、支101×日107(秋期)を用ひ、改良蔭と朝鮮在來式の松葉蔭にて上蔭せしめた。試験區は、

- 標準區 改良蔭を用ひ建抜をなし保温す。
- 第1區 密閉、改良蔭は建抜をなさず、松葉蔭では被覆せる紙、布片を除去せず。
- 第2區 20—25時間後改良蔭は建抜、松葉蔭は布片、紙除去、時々開放。
- 第3區 20—25時間後兩者建抜、密閉。
- 第4區 建抜せず時々開放。
- 第5區 第1區同様の取扱をなし保温。
- 第6區 第2區同様の取扱をなし保温。
- 第7區 第3區同様の取扱をなし保温。
- 第8區 第4區同様の取扱をなし保温。

繭絲織度は一定の傾向なし。

(513) 上蔭法に關する試験

原田長太郎、留與きえ 鹿兒島縣蠶試大島支場報告第2號 昭和10年3月

蔭の種類によりて繭質に如何なる差異あるやを調査せんとし、藤蔭、日の本蔭、橋口蔭、丸吉蔭、折蔭蔭、國華蔭を用ひて試験す。供試蠶品種は春は楸17×支14を、晩秋は日7×支106を用ふ。織度は各區間に大差なきも、折蔭最も太く、藤、丸吉、日の本の順に細く、橋口最も細し。

其他抄録番號 (469) (481) (499) 参照。

上蔭の(5) 藥劑散布 (實驗例5)

實驗例僅少にして一定の傾向發見し難し。

(514) 同功繭輕減に關する試験

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告第8號 大正15年3月

(支101×支9)×青熟を用ひ、對照區、タントメック、強減劑、玉繭防止劑、馬印玉止劑、トイロシ菌磨粉、糊粉、フルコール5%液、水等を以て同功繭防止試験をなす。繭絲織度は對照區、糊粉區が細く他は太い。

(515) 營繭時に於るフオルマリン瓦斯の影響

瀬尾武文 鹿兒島蠶試報告第29號 昭和10年3月  
營繭中蠶箔内に所定のフオルマリン水を浸潤せしめたる天竺綿布を置き、以て營繭時のフオルマリン瓦斯が繭質、絲質に及ぼす影響を知らんむ。蠶品種は春は支106×日7、初秋は日7×支106を用ひたり。試験區はフオルマリン0.5%區、同0.25%區、同0.1%區、對照區の四區を用ふ。上蔭中の平均温度は21.7°C、湿度は85%なり。織度は0.5%最も太く、0.25%區、0.1%區の順に細く、對照區最も細し。

(516) 營繭時に於けるフオルマリン瓦撤影響試験

富秀雄、中山朝一郎、山口留一 長崎蠶試報告第3號 昭和10年8月

春は楸10×支14、初秋、晩秋は支10×日7を用ひ、試験區は對照區甲、同乙、フオルマリン0.1%區、同0.25%區、同0.5%區の五區とす。但し甲區は普通上蔭法により、乙區は營繭中水を使用す。試験成績中織度に關しては對照區甲は他區に比し稍々大なり。但し其の傾向顯著ならず。

其他抄録番號 (496) (499)参照

上蔭の(6) 屋外上蔭 (實驗例9)

屋外上蔭は屋内上蔭に比し、繭絲織度太き傾向あり。

(517) 屋内上蔭と屋外上蔭との比較試験

静岡縣蠶業試驗場 静岡蠶試第10號 昭和10年3月

供試蠶品種は日1×支4(春)、國富×浙江(初秋及び晩秋)とし、春蠶、初秋蠶及び晩秋蠶の3期に試験せるに、繭絲織度は春蠶期には屋外區遙かに太く、初秋蠶期にも屋外區稍々太く、晩秋蠶期には屋内區稍々太し。

(518) 屋外上蔭の繭質試験

味岡秀夫、堀之内綱華 鹿兒島縣蠶試試驗報告第4號 昭和6年8月

1. 春期日1×支4を以て屋外上蔭と屋内上蔭とを比較するに、織度は屋外上蔭の方が太し。
2. 秋期日1×支101を以て屋外上蔭と室内、同林間

區、屋内上葦開放區、同密閉區とに分けたる場合織度は屋外區は屋内區より太く、中でも屋外上葦林間區殊に太し。

#### (519) 屋外上葦試験

小松茂久、瀧谷雄、中山高松 神奈川蠶試報告第2號 昭和7年3月

屋内條桑屋内上葦、屋内條桑屋外上葦、屋外條桑屋内上葦、屋外條桑屋外上葦、普通育屋内上葦、普通育屋外上葦、屋外平飼屋内上葦、屋外平飼屋外上葦の8區とす。繭絲織度は春は屋内條桑屋外上葦區稍々太し。初秋は普通育屋外上葦區最も太く、屋外平飼屋内上葦區最も細し。晩秋は普通育屋外上葦區最も太く、屋外平飼屋外上葦區最も細し。

#### (520) 屋外上葦試験

栃木蠶試那須支場 栃木蠶試那須支場事報 昭和7年4月

屋内上葦、屋外上葦の2區とし、蠶品種は春 支4×日1、秋 支105×日110を用ひた。繭絲織度は春と初秋には屋内上葦より屋外上葦太く、晩秋は之に反す。

#### (521) 屋外上葦試験

熊田和雄、金島忠夫 廣島蠶試彙報第5號 昭和8年4月

屋内上葦と屋外上葦の各々に付藤葦と折葦を用ひたるに、繭絲織度は屋外上葦折葦區最も太く、屋内上葦折葦區之に次ぐ。

#### (522) 屋外上葦區に關する試験

富秀雄 長崎縣蠶業試驗場報告第2號 昭和8年12月

對照區と試験區(蠶室南側に天幕を張りて日覆となし、其の内部に上葦せしむ)に分け、日110×支105を用ひ秋期に行ふ。織度に於ては兩區間に大差なし。尙依託試験に於ても兩區間に大差なし。

#### (523) 屋外上葦の缺陷改善に關する試験

岡崎信 他2名 愛媛縣蠶試報告第23號 昭和9年3月

伊豫歐黃×伊豫金黃、歐16號×支14號、日110號×支105號の各品種を用ひ、試験區を標準區、屋外上葦第1區(屋外に上葦し保護す)、屋外上葦第2區(屋外に葦拔迄保護す)、屋外上葦第3區(夜間及び雨天にのみ普通に保護し、晴天には屋外に保護す)の4區とす。

本試験の結果に依れば、繭絲織度は年により或は蠶期に依り異り、各區間に於て確然たる傾向を認め難し。

其他抄録番號(162) (475) 参照

### 上葦の(7)其他雜 (實驗例5)

#### (524) 太陽燈の繭繖及び生絲に關する試験

井上柳梧、三輪貞徳、山崎壽、阪本孝子、山越里子 蠶絲學雜誌第3卷 第2號 昭和5年12月

1. 支4を用ひ、上葦中の溫度を77°Fにし、濕度を55%、65%、75%の3種にし、是等3種の濕度を有する室に置く日数を變化せしめて、15の試験區を作り試験せるに、織度に關しては大なる差異を認めず。
2. 歐9及び昭和を以て上葦中を第1區(85°F、85%)、第2區(75°F、75%)、第3區(65°F、65%)に分けて試験せるに、織度に於ては第1區殊に太く、第2區最も細し。
3. 支7を用ひ、5齡第1日目より毎日上葦したる場合に、織度は上葦遅き程太き傾向あり。
4. 昭和及び支7を以て5齡期より給桑量及び給桑回数に減じたる場合につき試験す。試験區は給桑量100%區、80%區、60%區、30%區、給桑回数5回區、4回區、3回區、2回區に分つ。この場合織度に就て見るに、給桑量又は給桑回数を減少したる場合には一般に細くなる傾向あり。

#### (525) 所謂改良葦の更新方法に就て

牛込正一 群馬縣蠶試彙報第5號 昭和7年5月

1. 改良葦に工業用膠、柿澱の稀釋液を塗布し、次の各區を設け、夫等の繭質に及ぼす影響を見んとし、春期歐17×支14、秋期は日110×支102、日110×支105を以て試験す。澱2倍區、澱4倍區、膠40倍區、膠60倍區、膠80倍區、對照區の6區に分け、營繭中の濕湿度を異にせり。織度と濕度の影響はあるものの、各區間には一定の傾向なし。
2. 繭綿の附着せる葦と然らざる葦とを使用し、夫れが繭質に及ぼす影響を知らんとし、多繭綿區、中繭綿區、少繭綿區、洗濯區に分ち、初秋、晩秋共に日110×支105を用ひて試験す。織度は各區間に一定の傾向認め難し。

#### (526) 葦固定器の比較

富久雄、山口留一 長崎蠶試報告第3號 昭和10年8月

初秋、晩秋共に支106×日7を用ひ、試験區は對照區(葦固定器を使用せず)、池下式區、清田式區、西村式區、日の本式區、吉岡式區、福田式區の7區を設く。試験結果中織度に關しては各區間に大差なし。

#### (527) 所謂「玉別け」に就て

富久雄、山口留一 長崎蠶試報告第3號 昭和10



年8月

普通上簇法及び上簇後適期に玉別けを行ひ、別箔に上簇する法とを行ひ比較試験す。初秋、晩秋共に支106×目7を用ふ。その結果織度に關しては兩區に差異なし。

(528) 再營繭による繭絲性狀の變化に就いて

菅野芳衛 郡是製絲蠶事所試験彙報第2號 昭和10年12月

供試品種は郡是白×郡是金、郡是金、分離白×臺白及び分離白×國蠶支106號である。

對照區と再營繭區とに分けた。再營繭區は更に第2日再營繭區、第3日再營繭區、第4日再營繭區とに區分した。第2日再營繭區とは上簇後第2日に吐絲營繭中の繭を切開して蠶を採り出し、更に營繭せしめたものである。斯くして營ましたる繭の外層と對照區の外層とに於けるセリシンの性狀を比較した。

織度に關する點を見ると、一頭(平均織度に於ては)第2日再營繭區最も太く、對照區之に次ぎ、第3日再營繭區(又は第3日及び第4日平均織度)最も細い。然し再營繭區はいづれも再營繭を行ふ時期の正常繭の繭絲織度と全然同じである。

(昭和12年2月稿)